

サムエル記第一 (11)

「契約の箱の返還 (1)」

1 サム 6 : 1~12

1. 文脈の確認

I. 王政に向けた準備 (1~9 章)

A. サムエルの誕生と幼少期 (1 章)

B. ハンナの賛歌 (2 : 1~10)

C. シロでの霊的状况 (2 : 11~36)

D. サムエルの召し (3 章)

E. 契約の箱 (4~7 章)

1. 奪われた契約の箱 (4 章)

2. 契約の箱の力 (5 章)

3. 契約の箱の返還 (6 章)

(1) 神の裁きを終わらせる計画 (6 : 1~12)

(2) 契約の箱のベテ・シェメシュへの帰還 (6 : 13~18)

(3) 契約の箱のキルヤテ・エアリムへの移動 (6 : 19~7 : 1)

2. 注目すべき点

(1) 契約の箱がペリシテ人によって略奪された。

(2) イスラエルは「神の栄光が去った」と理解した。

(3) 契約の箱は、ペリシテの地で力を発揮する。

(4) ペリシテ人たちは、契約の箱を返還する。

命題：真の知恵は、出来事の背後にある神の御手を認めることから始まる。

この箇所を 3 区分して学ぶと、それが分かる。

I. ペリシテ人たちの問い (1~2 節)

1. 1 節

1Sa 6:1 【主】の箱は七か月間ペリシテ人の地にあった。

(1) この七か月間で、ペリシテ人は【主】を恐れることを学んだ。

①ペリシテ人の主神であるダゴンが辱めを受けた。

②人々は腫物で打たれ、苦しんだ。

③領主たちは、【主】を恐れることを学び始めた。

2. 2 節

1Sa 6:2 ペリシテ人は祭司たちと占い師たちを呼び寄せて言った。「【主】の箱をどうしたらよいでしょうか。どのようにして、それを元の場所に送り返せるか、教えてください。」

(1) 領主たちは、祭司たちと占い師たちを呼び寄せた。

①返還の方法を間違えると、より深刻な事態に陥ると考えた。

②彼らは、正しい返還の方法について尋ねた。

(2) 祭司たちと占い師たちの役割

①祭司たちの役割は、儀式的に正しい運搬方法を助言することである。

②占い師たちの役割は、返還する日時を助言することである。

II. 祭司たちと占い師たちの答え (3～9 節)

1. 3 節

1Sa 6:3 彼らは答えた。「イスラエルの神の箱を送り返すのなら、何もつけないで送り返してはなりません。神に対して償いをしなければなりません。そうすれば、あなたがたは癒やされるでしょう。また、なぜ、神の手があなたがたから去らないかが分かるでしょう。」

(1) 祭司たちと占い師たちの助言

①償いのものをつけて送る。

②レビ 5 : 15 の原則と相通じるものがある。

Lev 5:15 「人が信頼を裏切るとき、すなわち、【主】の聖なるものに関して気づかずに罪に陥ってしまった場合、羊の群れから傷のない雄羊、それも、聖所のシェケルで数シェケルの償いの銀に相当すると評価される雄羊一匹を、代償のささげ物として【主】のもとに連れて行く。

③もし癒しが起こるなら、裁きはイスラエルの神からのものであることが分かる。

2. 4～5 節

1Sa 6:4 人々は言った。「私たちが送るべき償いのものは何ですか。」彼らは言った。「ペリシテ人の領主の数に合わせて、五つの金の腫物、つまり五つの金のねずみです。彼ら全員、つまりあなたがたの領主たちに、同じわざわいが下ったのですから。

1Sa 6:5 あなたがたの腫物の像、つまり、この地を破滅させようとしているねずみの像を造り、それらをイスラエルの神に貢ぎとして献げなさい。もしかしたら神は、あなたがたと、あなたがたの神々、そしてあなたがたの地の上にのしかかっている、その手を軽くされるかもしれません。

(1) 送るべき償いのものは何にすべきか。

①異教徒の習慣では、苦難の原因になっていたものを偶像神に献げていた。

②ここでは、5つの金の腫物と5つの金のねずみが提案された。

- ③ペリシテの領主 5 人が苦しめられた。
- ④苦しみの原因は、腫物とねずみである。
- ⑤それゆえ 5 つの金の腫物と 5 つの金のねずみである。

(2) 彼らは、神の怒りが取り除かれる可能性に賭けた。

- ①「その手を軽くされるかもしれません」とは、裁きが止むという意味である。

3. 6 節

1Sa 6:6 なぜ、あなたがたは、エジプト人とファラオが心を硬くしたように、心を硬くするのですか。神が彼らに対して力を働かせたときに、彼らはイスラエルを去らせ、イスラエルは出て行ったではありませんか。

(1) ペリシテ人たちは出エジプトの出来事を記憶していた。

- ①1 サム 4 : 8

1Sa 4:8 ああ、困ったことだ。だれがこの力ある神々の手から、われわれを救い出してくれるだろうか。これは、荒野で、ありとあらゆる災害をもってエジプトを打った神々だ。

(2) 祭司たちと占い師たちは、知恵ある判断を下すように提案している。

- ①エジプトに 10 の災害が下ったのは、民とファラオが心を硬くしたからである。
- ②最後には、エジプト人はイスラエルを去らせることになった。
- ③自分たちは、エジプト人と同じ失敗を繰り返すべきではない。
- ④この段階で、契約の箱をイスラエルに返還すべきである。

4. 7～8 節

1Sa 6:7 今、一台の新しい車を用意し、くびきを付けたことのない、乳を飲ませている雌牛を二頭取り、雌牛を車につなぎ、その子牛は引き離して小屋に戻しなさい。

1Sa 6:8 また、【主】の箱を取って車に載せなさい。償いとして返す金の品物を鞍袋に入れて、そのそばに置きなさい。そして、それが行くがままに、去らせなければなりません。

(1) 一台の新しい車を用意する。

- ①これは【主】への敬意の表明である。

(2) くびきを付けたことのない、乳を飲ませている雌牛二頭

- ①これも【主】への敬意の表明である。
- ②地の耕作に用いた牛は、聖なるささげ物にはならない。
- ③契約の箱を車に載せる。
- ④償いとして返す金の品物を鞍袋に入れて、そのそばに置く

(3) 子牛は引き離して小屋に戻す。

- ①雌牛が自然の摂理に反して行動するなら、疫病は超自然的なものであることが判明する。

5. 9 節

1Sa 6:9 注意して見ていなさい。その箱がその国境への道をベテ・シェメシュに上って行くな
ら、私たちにこの大きなわざわいを起こしたのはあの神です。もし行かないなら、神の手が私
たちを打ったのではなく、私たちに偶然起こったことだと分かります。」

(1) この節では、契約の箱が神ご自身であるかのように語られている。

- ①国境を超えた先にあるのがベテ・シェメシュである。

(2) ベテ・シェメシュ

- ①「太陽の家」という意味である。カナン人時代、偶像礼拝の町であった。
②ペリシテの地から最短距離にあるユダの町である。

(3) 牛車が直接ベテ・シェメシュに向かうかどうか。

- ①もし直接向かうなら、ペリシテの地にわざわいを起こしたのは【主】である。
②もし行かないなら、わざわいは偶然起こったことである。

III. 契約の箱の返還 (10～12 節)

1. 10～11 節

1Sa 6:10 人々はそのようにした。彼らは乳を飲ませている雌牛を二頭取り、それを車につな
いだ。子牛は小屋に閉じ込めた。

1Sa 6:11 そして【主】の箱を車に載せ、また金のねずみ、すなわち腫物の像を入れた鞍袋を載
せた。

(1) 人々は、祭司たちと占い師たちの助言どおりに実行した。

- ①乳を飲ませている雌牛を二頭取って、車につないだ。
②子牛は小屋に閉じ込めた。
③契約の箱を車に載せた。
④金のねずみと腫物の像を入れた鞍袋をそのそばに置いた。

2. 12 節

1Sa 6:12 雌牛は、ベテ・シェメシュへの道、一本の大路をまっすぐに進んだ。鳴きながら進み
続け、右にも左にもそれなかった。ペリシテ人の領主たちは、ベテ・シェメシュの国境まで、

その後について行った。

(1) 雌牛は、エクロンからベテ・シェメシュまで一直線に進んだ。

①「鳴きながら」は、雌牛の上に大きな力がのしかかっていたことを示している。

②雌牛は、自然の摂理に反して行動している。

(2) ペリシテ人の領主たちは、ベテ・シェメシュの国境までその後について行った。

①通常は、人は牛車の前に立って導く。

②ここでは牛車の後ろに立って、牛の思いどおりに進むようにしている。

結論：今日の信者への適用

1. 神の御手を認める謙遜な心を持つ

(1) ペリシテ人たち

①異教徒であった。

②自分たちに起こった出来事を単なる偶然として片づけなかった。

③「これはイスラエルの神の御手ではないか」と真剣に考えた。

(2) イスラエルの民

①神の民であった。

②契約の箱をお守りのように扱った。

③神ご自身を見失っていた。

(3) 私たちも、人生の出来事を偶然や運のせいにしてはならない。

①「主はこの出来事を通して何を語っておられるのか」と問いかける必要がある。

②知恵の第一歩は、神の御手を認めることである。

* 順境の中では感謝を学ぶ。

* 試練の中では訓練を学ぶ。

* 失敗の中では悔い改めを学ぶ。

2. 心を頑なにしてはならない

(1) 祭司たちはペリシテ人に向かって、助言した。

「なぜ、あなたがたは、エジプト人とファラオが心を硬くしたように、心を硬くするのですか」(6 節)

(2) 神は繰り返し警告を与えられる。

(3) しかし、人は自分の考えに固執すると、その声を聞かなくなる。

①聖書のことばによる警告

②良心の痛み

③周囲からの忠告

④試練を通した神の訓練

(4) 神の声を無視し続けるなら、霊的成長は止まる。

「今日、もし御声を聞くなら、心を頑なにしてはならない」(ヘブ 3 : 15)

3. 神はご自身の目的を必ず成し遂げられる

(1) 雌牛が、子牛を残したまま一直線にベテ・シェメシュへ向かった。

①これは、神の主権を示す奇跡である。

(2) 人間の目には不可能に見えても、神が導かれるなら、その計画は必ず実現する。

①神は契約の箱を守られた。

②神はイスラエルを見捨てておられなかった。

③神はご自身の栄光を回復された。

(3) 学ぶべき教訓

「人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、その人の歩みを確かなものにするのは【主】である」(箴 16 : 9)

サムエル記第一 (12)

「契約の箱の返還 (2)」

1 サム 6 : 13~7 : 1

1. 文脈の確認

I. 王政に向けた準備 (1~9 章)

A. サムエルの誕生と幼少期 (1 章)

B. ハンナの賛歌 (2 : 1~10)

C. シロでの霊的状况 (2 : 11~36)

D. サムエルの召し (3 章)

E. 契約の箱 (4~7 章)

1. 奪われた契約の箱 (4 章)

2. 契約の箱の力 (5 章)

3. 契約の箱の返還 (6 章)

(1) 神の裁きを終わらせる計画 (6 : 1~12)

(2) 契約の箱のベテ・シェメシュへの帰還 (6 : 13~18)

(3) 契約の箱のキルヤテ・エアリムへの移動 (6 : 19~7 : 1)

2. 注目すべき点

- (1) 契約の箱がペリシテ人によって略奪された。
- (2) イスラエルは「神の栄光が去った」と理解した。
- (3) 契約の箱は、ペリシテの地で力を発揮する。
- (4) ペリシテ人たちは、契約の箱を返還する。
- (5) 契約の箱は、ベテ・シェメシュの人たちを打つ。

命題：神に近づくには、神が定めた方法に従わなければならない。

この箇所を 2 区分して学ぶと、それが分かる。

I. 契約の箱のベテ・シェメシュへの帰還 (6 : 13~18)

1. 13~14 節

1Sa 6:13 ベテ・シェメシュの人たちは、谷間で小麦の刈り入れをしていたが、目を上げると、神の箱が見えた。彼らはそれを見て喜んだ。

1Sa 6:14 車はベテ・シェメシュ人ヨシュアの畑に来て、そこにとどまった。そこには大きな石があった。人々は、車の木を割り、雌牛を全焼のささげ物として【主】に献げた。

(1) ベテ・シェメシュの人たちは、小麦の刈り入れをしていた。

①小麦の刈り入れの時期は、5 月頃である。

(2) 彼らは驚くべき光景を目にした。

- ①牛車に載せられた契約の箱が近づいて来るのを目にした。
- ②彼らはそれを見て喜んだ。
- ③車は、ベテ・シェメシュ人ヨシュアの畑に来て、そこにとどまった。

(3) 人々は【主】に全焼のささげ物を献げた。

- ①そこには大きな石があった。
 - *大きな岩盤であろう。これを祭壇として用いた。
- ②車の木を割り、それを薪とした。
- ③雌牛をほふり、全焼のささげ物とした。
 - *これを行ったのは、祭司たちである。

2. 15 節

1Sa 6:15 レビ人たちは、【主】の箱と、そばにあった金の品物の入っている鞍袋を降ろし、その大きな石の上に置いた。その日、ベテ・シェメシュの人たちは全焼のささげ物を献げ、いけにえを【主】に献げた。

(1) ベテ・シェメシュは祭司の町である。

- ①住民たちは、律法の教えをよく理解していた。
- ②レビ人たちが、契約の箱と金の品物の入っている鞍袋を下した。
- ③祭司たちが、全焼のささげ物を【主】に献げた。

3. 16 節

1Sa 6:16 ペリシテ人の五人の領主は、これを見て、その日エクロンに帰った。

(1) ペリシテ人の 5 人の領主は、災いが超自然的なものであることを確信した。

- ①彼らは、ベテ・シェメシュの人たちが【主】にいけにえを献げるのを目撃した。
- ②これを見て、その日エクロンに帰った。

4. 17 節

1Sa 6:17 ペリシテ人が償いとして【主】に返した金の腫物は、アシュドデのために一つ、ガザのために一つ、アシュケロンのために一つ、ガテのために一つ、エクロンのために一つであった。

(1) 5 つの金の腫物

- ①腫物の形をした金の償いの品である。
- ②5 つの町が、それぞれ 1 つを献げた。

* アシュドデ、ガザ、アシュケロン、ガテ、エクロン

5. 18 節

1Sa 6:18 すなわち、金のねずみは、五人の領主に属するペリシテ人の町の総数によっていた。それは、砦の町と城壁のない村の両方を含んでいる。彼らが【主】の箱を置いたアベルの大きな台は、今日までベテ・シェメシュ人ヨシュアの畑にある。

(1) 5 つの金のねずみ

- ① ねずみの害からの解放を願う償いの品物である。
- ② 5 大都市がそれぞれ 1 つの金のねずみを献げた。
- ③ 城壁のない村もその企画に参加した。

(2) 大きな石が記念となる。

- ① 「アベルの大きな台」は、「契約の箱が置かれた大きな石」である。
- ② アベルは固有名詞ではなく、草原であろう。
- ③ この大きな台は、今日までベテ・シェメシュ人ヨシュアの畑にある。

(3) 旧約聖書では、神の御業を忘れないために石を立てることがしばしば行われた。

- ① 創世記 28 章のヤコブの石の柱
- ② ヨシュア記 4 章のヨルダン川の石
- ③ 1 サムエル 7 章のエベン・エゼル

II. 契約の箱のキルヤテ・エアリムへの移動 (6 : 19 ~ 7 : 1)

1. 19 節

1Sa 6:19 主はベテ・シェメシュの人たちを打たれた。【主】の箱の中を見たからである。主は、民のうち七十人を、すなわち、千人に五人を打たれた。【主】が民を激しく打たれたので、民は喪に服した。

(1) 主はベテ・シェメシュの人たちを打たれた。

- ① 人々が契約の箱の周りに集うようになった。
- ② やがて、【主】への畏敬の念が薄れ、契約の箱の中を見る者が出た。
- ③ 民のうち 70 人、すなわち千人に 5 人が打たれた。
- ④ 祭司の町であるだけに、裁きも厳しい。

(2) 【主】が激しく怒られた理由

- ① 民 4 : 5 ~ 6

Num 4:5 宿営が出発するときは、アロンとその子らが入って行って、仕切りの垂れ幕を取り

降ろし、あかしの箱をそれでおおい、

Num 4:6 その上にじゅごんの皮の覆いを掛け、またその上に真っ青の布を広げ、担ぎ棒を通す。

②民 4 : 18~20

Num 4:18 「あなたがたは、ケハテ人諸氏族の部族をレビ人のうちから絶えさせてはならない。

Num 4:19 あなたがたは彼らに次のようにして、彼らが最も聖なるものに近づくときに、死なずに生きているようにせよ。アロンとその子らが入って行き、彼らにそれぞれの奉仕と、運ぶ物を指定しなければならない。

Num 4:20 彼らが入って行って、一目でも聖なるものを見て死ぬことのないようにするためである。」

③ベテ・シェメシュの人たちの罪は、エリのふたりの息子の罪に似ている。

2. 20 節

1Sa 6:20 ベテ・シェメシュの人たちは言った。「だれが、この聖なる神、【主】の前に立つことができるだろう。私たちのところから、だれのところに上って行くのだろうか。」

(1) 祭司の町ベテ・シェメシュは、契約の箱を恐れた。

①人間は、聖なる神、【主】の前に立つことができないと感じた。

②契約の箱を引き受けてくれる町を探した。

3. 21 節

1Sa 6:21 彼らはキルヤテ・エアリムの住民に使者を遣わして言った。「ペリシテ人が【主】の箱を返してよこしました。下って来て、あなたがたのところに運び上げてください。」

(1) キルヤテ・エアリムが選ばれた。

①この町は、ベテ・シェメシュから 15km ほど北東にある町である。

②そこに住むアビナダブの家へ契約の箱が運ばれる。

4. 1 節

1Sa 7:1 キルヤテ・エアリムの人々は来て、【主】の箱を運び上げ、丘の上のアビナダブの家に運んだ。そして、【主】の箱を守るために彼の息子エルアザルを聖別した。

(1) キルヤテ・エアリムでは悲劇は起きなかった。

①キルヤテ・エアリムの人々は、契約の箱に畏敬を示した。

②丘の上のアビナダブの家に安置した。

*アビナダブはレビ人の家系であろう。

*高き所は、礼拝の場に適している。

③契約の箱を守るために、アビナダブの息子エルアザルを聖別した。

(2) そして箱はそこで約 20 年間保管されることになる。

①契約の箱は、シロには戻らなかった。

②シロは、エリ家への裁きによって事実上その役割を終えていた。

(3) 20 年という長い期間は、イスラエルが霊的回復へ向かう準備期間となる。

①サムエルの指導力が確立される。

②民の悔い改めが進む。

③ミツパで霊的覚醒が起こる。

④ペリシテ人からの解放が始まる。

⑤1 サム 7:1 は、士師時代の混乱からサムエル時代の霊的刷新への転換点。

結論：今日の信者への適用

1. 神を自分流で礼拝していないか

(1) ベテ・シェメシュの人々は、契約の箱の帰還を喜んだ。

(2) しかし、その後、彼らは神が定めた境界線を越えてしまった。

(3) 私たちにもその危険性は付きまとう。

①神を愛している。

②礼拝を楽しんでいる。

③奉仕に熱心である。

(4) それでも、神のみことばよりも自分の考えを優先するなら、神を自分流に礼拝していることになる

(5) 真の礼拝とは、熱心さを神に献げるのではなく、神のことばに従うことである。

2. 神の愛だけでなく、神の聖さを覚えよう

(1) 現代の教会では、神の愛が強調されることが多くある。

(2) ベテ・シェメシュの人々は教訓を学んだ。

「この聖なる神、【主】の前にだれが立つことができるだろう」

(3) 十字架の恵みの大きさは、神の聖さを知るほどに理解できるようになる。

(4) 神への畏敬の念を失った信仰は、やがて表面的なものになる。

3. キリストによって大胆に神に近づこう

(1) 「だれが【主】の前に立つことができるだろう」

(2) これは、旧約聖書全体が投げかけている問いである。

(3) その答えが新約聖書で与えられる。

(4) 私たちは自分の義によって神に近づくことはできない。

(5) しかし、大祭司であるキリストによって近づくことができる。

「ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか」(ヘブ 4:16)

(6) 私たちは恐れて逃げる者ではなく、恵みによって近づく者である。

サムエル記第一 (13)
「さばきつかさとしての奉仕」
1 サム 7 : 2~17

1. 文脈の確認

I. 王政に向けた準備 (1~9 章)

- A. サムエルの誕生と幼少期 (1 章)
- B. ハンナの賛歌 (2 : 1~10)
- C. シロでの霊的状况 (2 : 11~36)
- D. サムエルの召し (3 章)
- E. 契約の箱 (4~7 章)
 - 1. 奪われた契約の箱 (4 章)
 - 2. 契約の箱の力 (5 章)
 - 3. 契約の箱の返還 (6 章)
 - 4. さばきつかさとしての奉仕 (7 章)

2. 注目すべき点

- (1) 「契約の箱物語」(4~7 章) の結論である。
- (2) 契約の箱はキルヤテ・エアリムに運ばれ、そこに 20 年間安置された。
- (3) 民はようやく【主】を慕い求めるようになった。
- (4) サムエルは、イスラエルのさばきつかさとして奉仕を開始する。

命題：サムエルの奉仕を通して、神の民は回復へと導かれる。

この箇所からサムエルの奉仕の 3 つのステップについて学ぼう。

I. さばきつかさとしての奉仕の始まり (2~4 節)

1. 2 節

1Sa 7:2 箱がキルヤテ・エアリムにとどまった日から長い年月がたって、二十年になった。イスラエルの全家は【主】を慕い求めている。

(1) 神政政治の国の原則

- ①民が罪を犯したなら、神の臨在が取り去られる。
- ②民が悔い改めたなら、神の臨在が戻って来る。
- ③箱がイスラエルの地に戻っただけでは、神の臨在が戻ったことにはならない。

(2) 箱がキルヤテ・エアリムにとどまってから 20 年が経過した。

- ①この 20 年は、民の信仰が回復するために要した年数である。

(3) 箱がそこにあった総年数は約 50 年である。

- ①2 サム 6 章で、ダビデが契約の箱をエルサレムに迎えた。
- ②この約 50 年間は、イスラエルにとって非常に象徴的な期間である。
* サウルとダビデの対比は、霊的姿勢の違いをよく表している。

(4) 「イスラエルの全家は【主】を慕い求めている」

- ①この間サムエルがどのような奉仕をしたのかは分からない。
- ②恐らく、各地を巡回して悔い改めを説いたのであろう。
- ③ようやく民は【主】を慕い求めるようになった。

2. 3～4 節

1Sa 7:3 サムエルはイスラエルの全家に言った。「もしあなたがたが、心のすべてをもって【主】に立ち返るなら、あなたがたの間から異国の神々やアシュタロテを取り除きなさい。そして心を【主】に向け、主にのみ仕えなさい。そうすれば、主はあなたがたをペリシテ人の手から救い出してくれます。」

1Sa 7:4 イスラエル人は、バアルやアシュタロテの神々を取り除き、【主】にのみ仕えた。

(1) さばきつかさとしての奉仕が始まる。

- ①心から【主】に立ち返る。
- ②異国の神々やアシュタロテを取り除く。
- ③心を【主】に向け、主にのみ仕える。
- ④そうすれば、主はイスラエル人をペリシテ人の手から救い出してくださる。
- ⑤武器に頼るのではなく、【主】に信頼することを教えた。

(2) イスラエル人は、応答した。

- ①バアルやアシュタロテの神々を取り除いた。
* フェニキアの神々（複数形である）
* バアルとアシュタロテは、夫婦である。
* この行為は、ペリシテ人の支配に対する反抗である。
- ②イスラエル人は、【主】にのみ仕えた。

II. 全国集会の召集 (5～14 節)

1. 5～6 節

1Sa 7:5 サムエルは言った。「全イスラエルを、ミツパに集めなさい。私はあなたがたのために【主】に祈ります。」

1Sa 7:6 彼らはミツパに集まり、水を汲んで【主】の前に注ぎ、その日は断食した。彼らはそこで、「私たちは【主】の前に罪ある者です」と言った。こうしてサムエルはミツパでイスラエル人をさばいた。

(1) ミツパは、民族的リバイバルを経験する場所となった。

①エルサレムの北約 8km

(2) サムエルがミツパを選んだ理由

①全国から集まりやすい中央の高台であった。

②全国集会の伝統を持つ場所であった。

③シロに代わる霊的集会所として適していた。

④防衛上も有利であった。

(3) 民族的悔い改めが起こった。

①水を汲んで【主】の前に注いだ。

②断食をした。

③罪の告白をした。

(4) 「こうしてサムエルはミツパでイスラエル人をさばいた」

①3 章ではサムエルは預言者として召された。

②7 章では、預言者、祭司的執りなし手、さばきつかさ 3 つの役割が結びつく。

③サムエルの全国的指導者としての働きがここから本格的に始まった。

2. 7～8 節

1Sa 7:7 イスラエル人がミツパに集まったことをペリシテ人が聞いたとき、ペリシテ人の領主たちはイスラエルに向かって上って来た。イスラエル人はこれを聞いて、ペリシテ人を恐れた。

1Sa 7:8 イスラエル人はサムエルに言った。「私たちから離れて黙っていないでください。私たちの神、【主】に叫ぶのをやめないでください。主が私たちをペリシテ人の手から救ってくださいようにと。」

(1) 支配者は、被支配者が勝手に全国集会を開くことを許さない。

①ペリシテ人の領主たちは、時を移さずにイスラエルを攻めてきた。

②イスラエル人はこれを聞いて、ペリシテ人を恐れた。

(2) イスラエル人の霊的状态の変化を読み取ることができる。

①彼らは、自分たちの無力さを認めた。

②彼らは、サムエルの執りなしを信頼した。

③彼らは、勝利は【主】から来ることを理解した。

④彼らは、【主】との契約関係を認識した。

3. 9 節

1Sa 7:9 サムエルは、乳離れしていない子羊一匹を取り、焼き尽くす全焼のささげ物として【主】に献げた。サムエルはイスラエルのために【主】に叫んだ。すると【主】は彼に答えられた。

(1) サムエルは祭司として奉仕をした。

①乳離れしていない子羊を全焼のささげ物として【主】に献げた。

* 焼き尽くすささげ物は、民の全的献身を示している。

②イスラエルのために【主】に叫んだ。

(2) 【主】は彼に答えられた。

①雷鳴は神の声である。

4. 10～11 節

1Sa 7:10 サムエルが全焼のささげ物を献げていたとき、ペリシテ人がイスラエルと戦おうとして近づいて来た。しかし【主】は、その日ペリシテ人の上に大きな雷鳴をとどろかせ、彼らをかき乱したので、彼らはイスラエルに打ち負かされた。

1Sa 7:11 イスラエルの人々は、ミツパから出てペリシテ人を追い、彼らを討ってベテ・カルの下にまで行った。

(1) 再記述の法則

①サムエルが全焼のささげ物を献げていたとき

②ペリシテ人が近づいて来た。

③【主】は、ペリシテ人の上に大きな雷鳴をとどろかせた。

④ペリシテ人は驚き、攪乱させられ、坂を下りながら逃げた。

⑤イスラエルの人々は、武器が劣っていることを忘れ、勇敢に挑みかかった。

⑥ペリシテ人は、ベテ・カルの下まで逃れた（場所是不明）。

5. 12 節

1Sa 7:12 サムエルは一つの石を取り、ミツパとエシェンの間に置き、それにエベン・エゼルという名をつけ、「ここまで【主】が私たちを助けてくださった」と言った。

(1) 敗北の地 (4: 1～22) が勝利を記念する地となった。

①サムエルは記念の石をミツパとエシェンの間に置いた。

②その石にエベン・エゼルという名をつけた。

* 「助けの石」

(2)「ここまで【主】が私たちを助けてくださった」

- ①エジプトからの救い
- ②士師時代の守り
- ③ペリシテによる圧迫
- ④契約の箱の喪失
- ⑤民の悔い改め
- ⑥今回の勝利

6. 13～14 節

1Sa 7:13 ペリシテ人は征服され、二度とイスラエルの領土に入って来なかった。サムエルの時代を通して、【主】の手がペリシテ人の上にのしかかっていた。

1Sa 7:14 ペリシテ人がイスラエルから奪い取っていた町々は、エクロンからガテまでが、イスラエルに戻った。イスラエルはペリシテ人の手から、その領土を解放した。そのころ、イスラエルとアモリ人の間には平和があった。

(1) ペリシテ人の活動が一時的に抑制された。

- ①サウル王の時代になって、争いが戻って来る。

(2) エクロンからガテまでの町々がイスラエルに戻った。

- ①アモリ人との間に平和があった。
- ②イスラエルと同盟関係に入り、ペリシテ人に対抗した。

III. さばきつかさとしての生涯 (15～17 節)

1. 15 節

1Sa 7:15 サムエルは、一生の間、イスラエルをさばいた。

(1) 王政が始まってからも、大きな霊的権威を行使した。

- ①民の目から見れば、生涯にわたって「さばきつかさ」であった。

2. 16～17 節

1Sa 7:16 彼は年ごとに、ベテル、ギルガル、ミツパを巡回し、これらすべての聖所でイスラエルをさばき、

1Sa 7:17 ラマに帰った。そこに自分の家があり、そこでイスラエルをさばいていたからである。彼はそこに【主】のために祭壇を築いた。

(1) サムエルは、イスラエルの信仰史を代表する重要拠点を巡回した。

- ①イスラエルをさばいた。

②預言者・士師・靈的指導者として奉仕していた。

- *裁判をする
- *神のみこころを教える
- *問題を解決する
- *国を導く

(2) ラマが本拠地であった。

- ①「【主】のために祭壇を築いた」
- ②この時代は、過渡期である。
- ③これは私的礼拝ではなく、奉仕の一環であったと考えられる。

結論：今日の信者への適用

1. 神は、悔い改める人を用いられる

- (1) 神が求めておられたのは、形式的な宗教ではなく、心からの悔い改めであった。
- (2) 神以上に頼り、神以上に愛するものがあるなら、それは偶像になり得る。
- (3) 神は、完全な人ではなく、主に立ち返る人を用いてくださる。

2. 神は、祈りの奉仕をする人を用いられる

- (1) サムエルは軍事的な英雄ではなかった。
- (2) 彼は、民のために祈り、全焼のいけにえを献げ、【主】に叫び続けた。
- (3) そして【主】が戦ってくださった。
- (4) 主イエスは今も私たちのために執りなしておられる（ヘブ7：25）。
- (5) 私たちは、その祈りに支えられながら、自らも祈る者となるよう招かれている。
- (6) 教会の真の力は、組織力や財力ではなく、神に信頼して祈るところにある。

3. 神は、神の助けを記憶し、忠実に仕える人を用いられる。

- (1) 記念の石「エベン・エゼル」を思い出そう。
- (2) 「ここまで【主】が私たちを助けてくださった」
- (3) 私たちも「ここまで主が助けてくださった」と告白することができる。
- (4) これは過去への感謝であると同時に、将来への信頼である。

サムエル記第一 (14)

「王を求める民」

1 サム 8 : 1～18

1. 文脈の確認

I. 王政に向けた準備 (1～9 章)

- A. サムエルの誕生と幼少期 (1 章)
- B. ハンナの賛歌 (2 : 1～10)
- C. シロでの霊的状况 (2 : 11～36)
- D. サムエルの召し (3 章)
- E. 契約の箱 (4～7 章)
- F. 王の選択 (8～9 章)
 - 1. 王を求める民 (8 : 1～18)
 - 2. 民の願いを受け入れる神 (8 : 19～9 : 14)
 - 3. サウルの選び (9 : 15～27)

2. 注目すべき点

- (1) イスラエルの歴史が新しい段階に入る。
 - ①神政政治 (神が王である体制) から、人間の王を持つ国家への転換点となる。
 - ②1～7 章は「士師サムエル」、8 章以降は「王政への移行」が主題となる。
- (2) サムエルの高齢と後継者問題がきっかけとなった。
 - ①サムエルの息子たちは、父の信仰を受け継がなかった。
 - ②エリの息子たちにつき、サムエルの息子たちも、父の信仰を受け継がなかった。
- (3) 民の要求には正当な部分と誤った部分があった。
 - ①指導者の交代を求めたこと自体は理解できる。
 - ②しかし、「ほかの国々のように王を」という願いは、間違っていた。
 - ③問題は「王を求めたこと」ではなく、「どのような理由で求めたか」である。

命題：神の民は、人間的な安心よりも神の統治を信頼すべきである。

民の要求とサムエルの警告を通して、この真理が正しいことを学ぼう。

I. 民の要求 (1～9 節)

1. 1～3 節

1Sa 8:1 サムエルは、年老いたとき、息子たちをイスラエルのさばきつかさとして任命した。

1Sa 8:2 長男の名はヨエル、次男の名はアビヤであった。彼らはベエル・シェバでさばきつかさをしていた。

1Sa 8:3 しかし、この息子たちは父の道に歩まず、利得を追い求め、賄賂を受け取り、さばきを曲げていた。

(1) サムエルは年老いた。

- ①恐らく 65～70 歳くらいであろう。
- ②彼は、後継者として息子たちをさばきつかさとして任命した。
- ③長男の名はヨエル、次男の名はアビヤであった。
- ④彼らはベエル・シェバ（ユダの地）でさばきつかさをしていた。

(2) 息子たちは父の道に歩まなかった。

- ①利得を追い求めた。
- ②賄賂を受け取った。
- ③さばきを曲げていた。

(3) 民は、エリの息子たちのことを思い出したに違いない。

- ①サムエルもまた息子たちの養育に失敗した。
- ②民は、国がサムエル以前の状態に戻ることを危惧した。

2. 4～5 節

1Sa 8:4 イスラエルの長老たちはみな集まり、ラマにいるサムエルのところにやって来て、

1Sa 8:5 彼に言った。「ご覧ください。あなたはお年を召し、ご子息たちはあなたの道を歩んでいません。どうか今、ほかのすべての国民のように、私たちをさばく王を立ててください。」

(1) イスラエルの長老たちは、王を立てて欲しいと願った。

- ①サムエルは高齢で、さばきつかさの役割を果たせなくなった。
*ペリシテ人の脅威が増しているので、力強いリーダーが必要である。
- ②後継者の息子たちには、道徳的な問題がある。
*サムエルの存命中に問題を解決しておく必要がある。

(2) 彼らは、「ほかのすべての国民のように」と言った。

- ①これは、他の異邦人諸国のようにという意味である。
- ②これはサムエルに対する反逆である以上に、神の王権を拒否する反逆である。

3. 6 節

1Sa 8:6 彼らが、「私たちをさばく王を私たちに与えてください」と言ったとき、そのことばはサムエルの目には悪しきことであった。それでサムエルは【主】に祈った。

(1) サムエルは、長老たちのことばを喜ばなかった。

- ①これほど重要なことであれば、まず【主】の御心を求める必要がある。
- ②しかし、長老たちは祈らないで、政治的に判断を下しただけである。
- ③イスラエルの民は、すでに王政よりも素晴らしい政治形態を与えられている。
- ④神政政治においては、神が王であり、さばきつかさは代理人である。
- ⑤民が従順であれば、【主】が勝利をもたらす。
- ⑥しかし民は、【主】の守りは不十分であると考えたのである。

(2) サムエルは、【主】に祈った。

- ①自分と息子たちが退けられることは、喜ばしいことではない。
- ②しかし彼は、預言者として神と民の間に立ち、御心を求めた。

4. 7～9 節

1Sa 8:7 【主】はサムエルに言われた。「民があなたに言うことは何であれ、それを聞き入れよ。なぜなら彼らは、あなたを拒んだのではなく、わたしが王として彼らを治めることを拒んだのだから。

1Sa 8:8 わたしが彼らをエジプトから連れ上った日から今日に至るまで、彼らのしたことといえば、わたしを捨てて、ほかの神々に仕えることだった。そのように彼らは、あなたにもしているのだ。

1Sa 8:9 今、彼らの声を聞き入れよ。ただし、彼らに自分たちを治める王の権利をはっきりと宣言せよ。」

(1) 【主】からの回答があった。

- ①民が言うことは何であれ、聞き入れよ。
- ②彼らは、サムエルを拒んだのではない。
- ③【主】を王とすることを拒んだのである。
 - *モーセの律法に従うことを拒んだ。
- ④人間の王がもたらす軍事力によって、敵から国を守ることを選んだのである。

(2) 彼らは、出エジプトから今日に至るまで、同じ罪を犯してきた。

- ①彼らは、【主】を捨てて、偶像の神々に仕えてきた。
- ②サムエルに対しても、同じことをしている。

(3) 彼らの願いを聞き入れてよいが、警告のことばを発すべきである。

- ①王政には多くの問題が潜んでいる。
- ②王の権利は、民を苦しめることになる。

II. サムエルの警告 (10～18 節)

1. 10 節

1Sa 8:10 サムエルは、自分に王を求めるこの民に対して、【主】のすべてのことばを話した。

(1) サムエルは、【主】と民の間に立って、預言者としての使命を果たした。

①彼は、「【主】のすべてのことばを話した」。

②「取る」という動詞が六回も繰り返される。

2. 11～12 節

1Sa 8:11 彼は言った。「あなたがたを治める王の権利はこうだ。あなたがたの息子たちを取り、戦車や軍馬に乗せ、自分の戦車の前を走らせる。

1Sa 8:12 また、自分のために千人隊の長や五十人隊の長として任命し、自分の耕地を耕させ、自分の刈り入れに従事させ、武具や戦車の部品を作らせる。

(1) 民を治める王の権利

①息子たちを取り、兵役に就かせる。

②王の耕地で働く農夫とする。

③武具や戦車の部品を作る職人とする。

3. 13 節

1Sa 8:13 また、あなたがたの娘たちを取り、香料を作る者や料理する者やパンを焼く者とする。

(1) 民を治める王の権利

①娘たちを取り、家事労働に就かせる。

* 香料を作る者、料理する者、パンを焼く者とする。

4. 14～17 節

1Sa 8:14 あなたがたの畑やぶどう畑や良いオリーブ畑を没収し、自分の家来たちに与える。

1Sa 8:15 あなたがたの穀物とぶどう畑の十分の一を取り、廷臣や家来たちに与える。

1Sa 8:16 あなたがたの奴隷や女奴隷、それにあなたがたの子牛やろばの最も良いものを取り、自分の仕事をさせる。

1Sa 8:17 あなたがたの羊の群れの十分の一を取り、あなたがた自身は王の奴隷となる。

(1) 民を治める王の権利

①畑やぶどう畑やオリーブ畑を没収し、自分の家来たちに与える。

②奴隷や女奴隷、子牛やろばの最良のものを取り、王の仕事をさせる。

③羊の群れの十分の一を取り、民は王の奴隷となる。

5. 18 節

1Sa 8:18 その日、あなたがたが自分たちのために選んだ王のゆえに泣き叫んでも、その日、

【主】はあなたがたに答えはしない。」

(1) 民は、自らの選びについて責任を負うことになる。

① 王政のゆえに泣き叫んでも、自分の選択の結果まで取り除かれることはない。

② この状況は、北王国イスラエルで顕著なものとなる。

結論：今日の信者への適用

1. 神よりも人間的な方法に頼っていないかを点検しよう

(1) 神の御心を待たずに人間的な知恵だけで決断する。

(2) 祈りよりも計画を優先する。

(3) 神への信頼よりも、お金、地位、人脈、能力に安心を見いだす。

2. 「周囲と同じでありたい」という誘惑に注意しよう

(1) イスラエルは、「ほかのすべての国民のように」と言った。

(2) これは、聖書が繰り返し警告する同調圧力である。

(3) 現代の同調圧力

① 世間の価値観

② 成功の基準

③ 流行

④ 多数派の意見

(4) 信者は、「世に属している」のではなく、「世に遣わされている」存在である。

3. 神の警告に耳を傾けよう

(1) サムエルは、王政の危険性を詳しく語った (9～18 節)。

(2) 神は裁きを下す前に、必ず警告を与えられる。

(3) 今日神は、警告を発してくださる。

① 聖書

② 聖霊の導き

③ 健全な牧会者や信仰の友

4. 自由意志を愛のために用いよう

(1) 神は人間の自由意志を尊重される。

(2) 神が許容されることと、神が喜ばれることは区別しなければならない。

(3) 自由意志は、イエスを信じ、愛を実践するために与えられている。

5. キリストを王として受け入れよう。

(1) 救済史の流れ

①サムエル記→ダビデ契約→メシア誕生→メシアの受難→メシアの再臨

(2) キリストは、千年王国を統治する王である。

サムエル記第一 (15)
「民の願いを受け入れる神」
1 サム 8 : 19～9 : 14

1. 文脈の確認

I. 王政に向けた準備 (1～9 章)

- A. サムエルの誕生と幼少期 (1 章)
- B. ハンナの賛歌 (2 : 1～10)
- C. シロでの霊的状况 (2 : 11～36)
- D. サムエルの召し (3 章)
- E. 契約の箱 (4～7 章)
- F. 王の選択 (8～9 章)
 - 1. 王を求める民 (8 : 1～18)
 - 2. 民の願いを受け入れる神 (8 : 19～9 : 14)
 - 3. サウルの選び (9 : 15～27)

2. 注目すべき点

- (1) イスラエルの歴史が新しい段階に入る。
 - ①神政政治 (神が王である体制) から、人間の王を持つ国家への転換点となる。
- (2) サムエルの高齢と後継者問題がきっかけとなった。
- (3) 民の要求には正当な部分と誤った部分があった。
- (4) 神は、人間の間違った願いさえも、ご計画の中で用いられる。

命題 : 神は、人間の選択をも用いて、ご自身のご計画を成し遂げられる。

8 章を民の選択、9 章を神の摂理として学ぶと、そのことが分かる。

I. 民の選択 (8 : 19～22)

1. 19～20 節

1Sa 8:19 しかし民は拒んで、サムエルの言うことを聞こうとしなかった。そして言った。「いや。どうしても、私たちの上には王が必要です。」

1Sa 8:20 そうすれば私たちもまた、ほかのすべての国民のようになり、王が私たちをさばき、私たちの先に立って出陣し、私たちの戦いを戦ってくれるでしょう。」

- (1) 民は、神の警告を拒否した。
 - ①民は、「どうしても、私たちの上には王が必要です」と言い張った。
 - ②罪人は、神のことばが明らかにされても、自分の願望を優先する傾向がある。

(2) 彼らは「他の国々のようになりたい」と願った。

- ①イスラエルは、「祭司の王国、聖なる国民」として召されていた(出 19:5~6)。
- ②しかし彼らは、その特別な召しを誇りとせず、諸国の政治制度を理想とした。
- ③神の民としてのアイデンティティーを捨て、世と同じになりたいという霊的問題であった。

(3) 彼らは王に神の役割を期待した。

- ①しかし、どれほど優れた王であっても、神の代わりにはなれない。

2. 21 節

1Sa 8:21 サムエルは、民のすべてのことばを聞いて、それを【主】の耳に入れた。

(1) サムエルは民と論争しなかった。

- ①サムエルは預言者として、神と民との仲介者の役割を忠実に果たした。

(2) 「【主】の耳に入れた」とは祈ったという意味である。

- ①これは、神に情報を伝えるためではなく、神の判断を仰ぐためである。
- ②民の要求 → サムエルの祈り → 神の決定

3. 22 節

1Sa 8:22 【主】はサムエルに言われた。「彼らの言うことを聞き、彼らのために王を立てよ。」
それで、サムエルはイスラエルの人々に「それぞれ自分の町に帰りなさい」と言った。

(1) 「彼らの声を聞き」とは、神が彼らの願いを是認されたという意味ではない。

- ①神が彼らの選択を許容されたということである(許容的御心)。
- ②神は、人間の自由な選択を尊重されることがある。
- ③そして、その選択がもたらす結果も経験させられる。

(2) 神は人間の罪さえも、ご計画の中で用いられる。

- ①サウルの即位
- ②ダビデ王朝の成立
- ③ダビデ契約(2サム7章)
- ④ダビデの子であるメシアの到来

(3) 「自分の町へ帰りなさい」は、神の時を待たせるためである。

- ①サムエルはその場で王を選ばなかった。
- ②神の時はまだ来っていない。

③「神の摂理」が、ここから静かに動き始める。

II. 神の摂理 (9 : 1~14)

1. 1~2 節

1Sa 9:1 ベニヤミン人で、その名をキシュという人がいた。キシュはアビエルの子で、アビエルはツェロルの子、ツェロルはベコラテの子、ベコラテはベニヤミン人アフィアハの子であった。彼は有力者であった。

1Sa 9:2 キシュには一人の息子がいて、その名をサウルといった。彼は美しい若者で、イスラエル人の中で彼より美しい者はいなかった。彼は民のだれよりも、肩から上だけ高かった。

(1) サウルは、王として理想的な条件を備えていた。

- ①良い家柄の出身 (ベニヤミン族)
- ②裕福な家庭、若さ、美しい容姿、人並み外れた高身長

(2) しかし、内面については何も語られていない。

- ①著者は、王に最も必要なものは外見とは別にあるということを暗示している。
- ②ダビデとの対比は、すでにここから始まっている。

(3) ベニヤミン族出身であった。

- ①士 19~21 章では、部族が滅亡寸前まで追い込まれるという悲劇を経験した。
- ②そのような部族から最初の王が出ることは、神の主権を示している。
- ③やがて王権は、ユダ族のダビデへと移される。

2. 3~4 節

1Sa 9:3 あるとき、サウルの父キシュの雌ろば数頭がいなくなったので、キシュは息子サウルに言った。「しもべを一人連れて、雌ろばを捜しに行ってくれ。」

1Sa 9:4 サウルはエフライムの山地を巡り、シャリシャの地を巡り歩いたが、それらは見つからなかった。さらに、シャアリムの地を巡り歩いたが、いなかった。ベニヤミン人の地を巡り歩いても、見つからなかった。

(1) 神の摂理は、ごく普通の日常から始まる。

- ①雌ろばがいなくなった。
- ②父が息子に搜索を命じた。
- ③サウルが忠実に従った。
- ④サウルは父に従う誠実な青年として描かれている。

(2) 「見つからなかった」が繰り返される。

- ①途中で雌ろばが見つかったいたら、サウルはサムエルに会うことはなかった。
- ②見つからなかったこと自体が、神の導きであった。

3. 5～6 節

1Sa 9:5 二人がツツの地にやって来たとき、サウルは一緒にいたしもべに言った。「さあ、もう帰ろう。父が雌ろばのことはさておき、私たちのほうを心配し始めるといけないから。」

1Sa 9:6 すると、しもべは言った。「ご覧ください。この町には神の人がいます。この人は敬われている人です。この人の言うことはみな、必ず実現します。今そこへ参りましょう。私たちが行く道を教えてくれるかもしれません。」

(1) サウルの誠実さが表れている。

- ①サウルは、ろばを見つけることよりも、父キシユの心配を気遣っている。

(2) 神は名もないしもべを用いられる。

- ①サウルはサムエルのことを知らなかったが、しもべは知っていた。

4. 7～9 節

1Sa 9:7 サウルはしもべに言った。「もし行くとすると、その人に何を持って行こうか。私たちの袋には、パンもなくなったし、神の人に持って行く贈り物もない。何かあるか。」

1Sa 9:8 しもべは再びサウルに答えた。「ご覧ください。私の手に四分の一シェケルの銀があります。これを神の人に差し上げたら、私たちの行く道を教えてください。」

1Sa 9:9 昔イスラエルでは、神のみこころを求めに行く人は「さあ、予見者のところへ行こう」とよく言っていた。今の預言者は、昔は予見者と呼ばれていたからである。

(1) 預言者を訪ねる際に贈り物を持参する習慣があった。

- ①しもべの備えが神の摂理となった。
- ②「銀貨四分の一シェケル」は、高価なものではない。
- ③しかし、この小さな備えが、サムエルに会うことへの道を開く。

(2) 9 節は挿入句である。

- ①先見者……神から受ける働きを強調
- ②預言者……人々に語る働きを強調

5. 10～11 節

1Sa 9:10 サウルはしもべに言った。「それはよい。さあ、行こう。」こうして、彼らは神の人のいる町へ行った。

1Sa 9:11 彼らがその町への坂道を上って行くと、水を汲みに出て来た娘たちに出会った。彼

らは「予見者はここにおられますか」と尋ねた。

(1) 井戸は出会いの場所であった。

①聖書には、井戸での重要な出会いが何度も記されている。

6. 12～13 節

1Sa 9:12 すると娘たちは答えて言った。「はい。この先におられます。さあ、急いでください。今日、町に来られました。今日、高き所で民のためにいけにえをお献げになりますから。

1Sa 9:13 町に入ると、あの方が見つかるでしょう。あの方が食事のために高き所に上られる前に。民は、あの方が来られるまで食事をしません。あの方がいけにえを祝福して、その後で、招かれた者たちが食事をすることになっているからです。今、上って行ってください。あの方は、すぐに見つかるでしょう。」

(1) 一つ一つの「偶然」が神の摂理である。

- ①この後の展開から、すべてが神の導きであったことが分かる。
- ②名もない若い娘たちが、「先見者はここにおられます」と伝える。
- ③神のタイミングは完全である。

(2) サムエルはなお民の霊的指導者であった。

- ①預言者・士師として、民の礼拝を導いていた。
- ②「高き所」は、神を礼拝するための正当な礼拝所である。

7. 14 節

1Sa 9:14 彼らが町へ上って行き、町に入りかかったとき、ちょうどサムエルが、高き所に上ろうとして彼らの方に向かって出て来た。

(1) この節は、神の摂理が成就する瞬間を描いている。

- ①この節の中心は、「ちょうど」という表現である。
- ②神の召しは人間の予想を超えている。
- ③サウルにとって、この日は、単なる「ろば探し」の一日であった。
- ④しかし神にとっては、イスラエル初代の王を任命する日であった。

結論：今日の信者への適用

1. 世の価値観ではなく、神のご支配に信頼しよう。

- (1) 目に見える人間の王に安心を求めた。
- (2) 現代の信者も同じ誘惑に直面している。
- (3) 私たちの真の王は、イエス・キリストである。
- (4) 信仰生活とは、「神の国の価値観」に従って歩むことである (ロマ 12:2)。

2. 神の摂理は、日常の出来事を通して働いていることを信じよう。

- (1) ろばがいなくなること
- (2) しもべの助言
- (3) 銀貨一枚
- (4) 井戸で娘たちに出会うこと
- (5) このような認識は、小さなことにも忠実であることにつながる。

3. 人生の主役は自分ではなく、神であることを覚えよう。

- (1) サウルは、ろばを捜しているつもりであった。
- (2) しかし神は、イスラエルの王をサムエルのもとへ導いておられた。
- (3) 箴言 16 章 9 節
「人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、【主】が人の歩みを確かにされる」

サムエル記第一 (16)

「サウルの選び」

1 サム 9 : 15～27

1. 文脈の確認

I. 王政に向けた準備 (1～9 章)

- A. サムエルの誕生と幼少期 (1 章)
- B. ハンナの賛歌 (2 : 1～10)
- C. シロでの霊的状况 (2 : 11～36)
- D. サムエルの召し (3 章)
- E. 契約の箱 (4～7 章)
- F. 王の選択 (8～9 章)
 - 1. 王を求める民 (8 : 1～18)
 - 2. 民の願いを受け入れる神 (8 : 19～9 : 14)
 - 3. サウルの選び (9 : 15～27)

2. 注目すべき点

- (1) 神政政治の下で王政が始まる。
- (2) 神は、人間の間違っただけの願いさえも、ご計画の中で用いられる。
- (3) 雌ろばを探す旅は、王として選ばれる旅であった。
- (4) サウルは「君主」として任命される。

命題：神は、ご自身の計画に従って人を召し、その働きへと導かれる。

この箇所を 3 つに区分して学ぶと、そのことが分かる。

I. 神は前もってサウルをサムエルに示された (15～17 節)

1. 15～16 節

1Sa 9:15 【主】は、サウルが来る前の日に、サムエルの耳を開いて告げておられた。

1Sa 9:16 「明日の今ごろ、わたしはある人をベニヤミンの地からあなたのところに遣わす。あなたはその人に油を注ぎ、わたしの民イスラエルの君主とせよ。彼はわたしの民をペリシテ人の手から救う。民の叫びがわたしに届き、わたしが自分の民に目を留めたからだ。」

(1) 神は前もってサムエルに啓示を与えられた。

- ①「耳を開く」は、「啓示を与える」「秘密を打ち明ける」という意味。
- ②サウルが到着する前に、神はすでにサムエルに計画を知らせておられた。
- ③神の摂理が人間の行動に先行していることが示されている。

(2) 神がサウルを遣わされた。

- ①サウル自身は、雌ろばを捜して歩いているつもりであった。
- ②しかし神の視点では、サウルは神によって遣わされた人物である。

(3) 神がサウルを君主として任命された。

- ①「君主」(nagid) は、「指導者」「任命された支配者」という意味である。
- ②イスラエルの真の王は主ご自身であり、サウルは神の代理として立てられる。
- ③サウルの使命は支配することではなく、救うことである。

2. 17 節

1Sa 9:17 サムエルがサウルを見るやいなや、【主】は彼に告げられた。「さあ、わたしがあなたに話した者だ。この者がわたしの民を支配するのだ。」

(1) 神のことばが成就した。

- ①神は、「明日の今ごろ、一人の人を遣わす」と約束された。
- ②その約束どおりサウルが現れる。

(2) サウルの選びは神の主権による。

- ①サムエルはまだサウルと話していない。
- ②しかし神は、「さあ、わたしがあなたに話した者だ」と言われる。
- ③民は王を求めたが、「誰が王になるか」は神が決定された。
- ④サウルは神の代理者である。
- ⑤民は「サウルの民」ではなく、「わたしの民」である。

(3) この時点では、神はサウルに大きな期待を寄せておられる。

- ①神の選びは現実であるが、それは人間の責任を取り除くものではない。

II. 神はサウルを選ばれたことを具体的に示された (18～24 節)

1. 18 節

1Sa 9:18 サウルは、門の中でサムエルに近づいて、言った。「予見者の家はどこですか。教えてください。」

(1) サウルはサムエルが誰であることを知らなかった。

- ①目の前の人物が誰であることを知らないで、「先見者の家はどこですか」と尋ねた。
- ②神は全体の計画をご存じであるが、人はその計画を知らずに歩んでいる。

(2) サウルはまだ謙遜な姿勢を示している。

- ①この段階では、後年のような高慢さや自己中心性はまだ現れていない。
- ②サウルの出発点は、決して悪いものではなかった。

2. 19～20 節

1Sa 9:19 サムエルはサウルに答えた。「私が予見者です。私より先に高き所に上りなさい。今日、あなたがたは私と一緒に食事をするのです。明日の朝、私があなたを送ります。あなたの心にあるすべてのことについて、話しましょう。

1Sa 9:20 三日前になくなったあなたの雌ろばについては、もう気にかけないようにしてください。見つかっていますから。全イスラエルの思いは、だれに向けられているのでしょうか。あなたと、あなたの父の全家にではありませんか。」

(1) サムエルは自らの正体を明かす。

- ①「私が予見者です」
- ②サムエルは予見者として、神のことばをサウルに伝える役割を担う。

(2) サムエルはサウルを特別な客として迎える。

- ①サウルは無名の若者ですが、サムエルは最初から特別な賓客として扱う。
- ②「あなたの心にあるすべてのことについて、話しましょう」
*神がサウルの将来について語ろうとしておられることも含んでいる。

(3) 雌ろばの問題はすでに解決している。

- ①サムエルは、神から情報を与えられている「予見者」である。
- ②中心テーマは、「雌ろば」から「王位」へと移る。

(4) 全イスラエルの思いは、サウルとサウルの父の全家に向けられている。

- ①民が求めているものが、あなたに与えられるという意味である。
- ②サムエルはまだ「あなたは王になる」とは言わないが、それを暗示している。

3. 21 節

1Sa 9:21 サウルは答えて言った。「私はベニヤミン人で、イスラエルの最も小さい部族の出ではありませんか。私の家族は、ベニヤミンの部族のどの家族よりも、取るに足りないものではありませんか。どうしてこのようなことを私に言われるのですか。」

(1) サウルは自分を王にふさわしい者とは考えていなかった。

- ①「私はベニヤミン人で、……最も小さい部族の出ではありませんか」
- ②士 19～21 章で、ベニヤミン族は内戦によって壊滅的な打撃を受けた。
- ③生き残った男子はわずか六百人となった (士 20:47)。

- ④「取るに足りない家族」とは謙遜な自己認識である。
- ⑤これは、自分の家柄が名門ではないという認識を表している。

(2) しかし、神の選びは人間の条件によらない。

- ①これは、聖書全体に流れる原則である。
- ②神は、人間的な資格ではなく、ご自身の目的に従って人を選ばれる。

4. 22 節

1Sa 9:22 サムエルはサウルとそのしもべを広間に連れて来て、三十人ほどの招かれた人たちの上座に着かせた。

(1) サウルは「高き所」の祭儀の食事に招かれた。

- ①これは単なる私的な食事ではなく、神の前での交わりの食事である。

(2) サムエルは、サウルとそのしもべを上座に座らせた。

- ①「上座」とは、最も名誉ある席である。
- ②普通であれば、長老、有力者、地域の指導者が座る場所である。
- ③ところが、無名の青年サウルがその席に着く。
- ④神の前では、人間の評価ではなく、神の選びが人を高くする。

(3) 招待客は「三十人ほど」いた。

- ①まだ油注ぎは行われていないが、「彼は特別である」ことを暗黙のうちに示した。

5. 23～24 節

1Sa 9:23 サムエルは料理人に、「取っておくようにと渡しておいた、ごちそうを出しなさい」と言った。

1Sa 9:24 料理人は、もも肉とその上にある部分を取り出し、サウルの前に置いた。サムエルは言った。「これはあなたのために取っておいたものです。あなたの前に置いて、食べてください。その肉は、私が民を招いたと言って、この定められた時のため、あなたのために取り分けておいたものですから。」その日、サウルはサムエルと一緒に食事をした。

(1) 最上の取り分がサウルに与えられた。

- ①右の腿は、名誉ある客や祭司に与えられる特別な部位（レビ 7：32～34）。
- ②この取り分は前もって準備されていた。

(2) 「この定められた時のため」

- ①神が定められた時が到来したのである。

(3) 王としての就任式ではない。

- ①まだ、油注ぎ (10 : 1) と公的選出 (10 : 17 以下) は行われていない。
- ②神は、王として任命する前に、サウルを王にふさわしい客として遇される。

III. 神はサウルにご自身のことばを託そうとされた (25～27 節)

1. 25 節

1Sa 9:25 彼らは高き所から町に下って来た。それからサムエルはサウルと屋上で話をした。

(1) 公の食事から私的な対話へ移る。

- ①サムエルはサウルを屋上に招き、二人だけで語り合う。
- ②屋上は静かな対話の場である。
- ③サムエルは、人目につかない場所で、サウルに重要なことを伝えようとした。
- ④何を語ったかは、記されていない。

(2) 召命には備えの時間がある。

- ①正式な油注ぎは翌朝 (10 : 1) である。
- ②その前夜に、サムエルはサウルと語り合う。
- ③神の働きには、必ず準備の時間がある。
- ④神は使命よりも先に、その人自身を整えられる。

2. 26～27 節

1Sa 9:26 彼らは朝早く起きた。夜が明けかかると、サムエルは、屋上にいるサウルに叫んだ。

「起きてください。あなたを送りましょう。」サウルは起きて、サムエルと二人で外に出た。

1Sa 9:27 二人が町外れへと下っていたとき、サムエルがサウルに「しもべに、私たちより先に行くように言ってください」と言ったので、しもべは先に行った。「あなたは、ここにしばらくとどまってください。神のことばをお聞かせしますから。」

(1) 翌朝、サムエルは町外れまでサウルを見送る。

- ①これは、主人が大切な客を見送る礼儀である。
- ②それ以上に、これから語る神のことばが極めて重要であることを示している。

(2) 召命は個人的に語られる。

- ①しもべは先に行かされる。
- ②これから語られることは、サウルだけが聞くべき神のことばである。
- ③神は全国民に向かってではなく、まず一人の人に語られる。
- ④この場面の頂点は、「神のことばをお聞かせしますから」という宣言である。

結論：今日の信者への適用

1. 神は私たちの日常を通して導かれる。
 - (1) サウルは、雌ろばを捜すという日常の務めを果たしていた。
 - (2) しかし、その旅の背後には神の摂理があった。
 - (3) 私たちも、平凡だと思っている毎日の働きの中で、神に導かれていることがある。
 - (4) 目の前の小さな責任に忠実であろう。

2. 神の召しは恵みによる。
 - (1) サウルは、自分を王にふさわしいとは考えていなかった。
 - (2) 神が人を用いられるのは、その人が優れているからではない。
 - (3) 新約の信者も同じである。
 - (4) 自分の能力ではなく、神の恵みに信頼して歩む者となろう。

3. 神のことばを聞くことから奉仕は始まる。
 - (1) サムエルは油を注ぐ前に、「神のことばをお聞かせしますから」と言った。
 - (2) 神の働きは、まず神のことばを聞くことから始まる。
 - (3) 聖書を読み、祈り、御霊の導きを求める生活こそ、すべての奉仕の土台である。

サムエル記第一 (17)

「サウルを王として選ぶイスラエル (1)」

1 サム 10 : 1~16

1. 文脈の確認

I. 王政に向けた準備 (1~9 章)

II. サウルの治世 (10~31 章)

A. サウルの確立 (10~14 章)

1. サウルを王として選ぶイスラエル (10 章)

2. 注目すべき点

- (1) イスラエル最初の王への秘密の油注ぎ。
- (2) 三つのしるしによる神の導きの確認。
- (3) 聖霊によって「新しい人」に変えられるサウル。
- (4) 王も預言者の権威に従うという神の秩序。
- (5) 13 章の失敗へとつながる重要な伏線がここに置かれている。

命題：神は召された者に、使命を果たすために必要な備えを与えられる。

召し、確信、力という 3 つのキーワードがそれを示している。

I. 神は召しを明確にしてくださる (1 節)

1. 1 節

1Sa 10:1 サムエルは油の壺を取ってサウルの頭に注ぎ、彼に口づけして言った。「【主】が、ご自分のゆずりの地と民を治める君主とするため、あなたに油を注がれたのではありませんか。」

(1) 王への油注ぎ (任職)

- ①これがイスラエル最初の王への油注ぎである。
- ②油そのものに力があるのではなく、神がその人を聖別されたことに意味がある。

(2) 王になったのは、神の選びによる。

- ①王を立てているのは民でも、サムエルでもなく、【主】である。

(3) 「君主」(ナギード) という表現

- ①「王」(メレク) ではなく、「君主」「指導者」(ナギード) である。
- ②サウルは、神の代理者である (異邦諸国の絶対君主制とは大きく異なる)。

(4) サムエルの口づけ

- ①神の命令に従って、サウルを正式に受け入れたことを示している。

II. 神は召した者に確信を与えてくださる (2～8 節)

1. 2 節

1Sa 10:2 今日、私のもとを離れて行くとき、ベニヤミンの領内のツェルツァフにあるラケルの墓のそばで、二人の人に会うでしょう。彼らはあなたに、『捜し歩いておられた雌ろばは見つかりました。あなたの父上は、雌ろばのことはどうでもよくなり、息子のためにどうしたらよいのだろうかと言って、あなたがたのことを心配しておられます』と言うでしょう。

(1) 神がサウルに与えた「三つのしるし」の第一

- ①ろば探しは、9 章では偶然の出来事のように見えた。
- ②10 章になると、すべて神が前もってご存じであることが明らかになる。
- ③ここでロバの問題は終わる。
- ④神は、サウルの関心を「ロバ」から「王としての使命」へと移そうとしている。

(2) ラケルの墓の象徴性

- ①ラケルは、ベニヤミンを産んで亡くなった人である (創 35 : 16～20)。
- ②ベニヤミン族の母の墓の近くで、王としての歩みが始まる。

2. 3～4 節

1Sa 10:3 そこからなお進んで、タボルの櫪の木のところまで行くと、そこで、神のもとに行こうとベテルに上って行く三人の人に会います。一人は子やぎを三匹持ち、一人は円形パンを三つ持ち、一人はぶどう酒の皮袋を一つ持っています。

1Sa 10:4 彼らはあなたにあいさつをして、あなたにパンを二つくれます。彼らの手から受け取りなさい。

(1) 神がサウルに与えた「三つのしるし」の第二

- ①ベテルへ礼拝に向かう人々に出会う。
- ②子やぎ、パン、ぶどう酒は、礼拝のための供え物である。
- ③彼らは、見ず知らずのサウルにパンを二個与える。
- ④これは普通なら予想できない行動である。
- ⑤神は王として召すだけでなく、その必要も満たしてくださる。

(2) 「受け取りなさい」

- ①神の備えを、信仰によって受け取ることが大切である。
- ②まだ王になっていないサウルが、神を礼拝する民からパンを受ける。
- ③将来、神が民を通して王を養われることを暗示している。

3. 5～6 節

1Sa 10:5 それから、ペリシテ人の守備隊がいるギブア・エロヒムに着きます。その町に入るとき、琴、タンバリン、笛、豎琴を鳴らす者を先頭に、預言をしながら高き所から下って来る預言者の一団に出会います。

1Sa 10:6 【主】の霊があなたの上に激しく下り、あなたも彼らと一緒に預言して、新しい人に変えられます。

(1) 神がサウルに与えた「三つのしるし」の第三

①サウル自身の内面に起こる神の働き

(2) ギブア・エロヒム (神のギブア)

- ①サウルの故郷ギブアは、ここでは「ギブア・エロヒム」と呼ばれている。
- ②おそらくそこに預言者の共同体が存在していたのであろう。
- ③しかし同時に、「ペリシテ人の守備隊がいる」とも記されている。
- ④イスラエルの霊的・政治的現状が一節で表現されている。

(3) 預言者の一団

- ①神の霊に導かれて神を賛美し、神のことばを語る共同体。
- ②楽器が記されているので、礼拝や賛美を伴った預言活動であったことが分かる。

(4) 「【主】の霊が激しく下る」

- ①これは、王としての使命を果たすための聖霊の力である。
- ②「あなたも預言する」
- ③預言者たちと同じように神を賛美し、神のことばを語る状態になる。
- ④「新しい人」とは、新約でいう「新生」ではない。
- ⑤王としての使命に必要な資質と勇気と力が神から与えられるという意味。

4. 7～8 節

1Sa 10:7 これらのしるしがあなたに起こったら、自分の力でできることをしなさい。神があなたとともにおられるのですから。

1Sa 10:8 私より先にギルガルに下って行きなさい。私も全焼のささげ物と交わりのいけにえを献げるために、あなたのところへ下って行きます。私があるところに着くまで、そこで七日間待たなければなりません。それからあなたがなすべきことを教えます。」

(1) 「自分の力でできることをしなさい」

- ①「好き勝手に行動しなさい」ではない。

- ②「神が開いてくださる機会に応答しなさい」という意味である。
- ③しかし無制限の自由ではない。

(2)「七日待ちなさい」という命令が与えられる。

- ①これは将来の命令である。
- ②実際、この命令が実行されるのは 13 章である。

(3) ギルガルという場所

- ①ヨシュアがヨルダン川を渡った後、最初に宿営した場所 (ヨシ 4 章)
- ②割礼が回復された場所 (ヨシ 5 章)
- ③過越が祝われた場所 (ヨシ 5 章)
- ④神との契約更新の場所

(4) 王にも越えてはならない権限がある。

- ①祭儀を執り行うのは、王ではなく、神が任命した預言者・祭司の務めである。
- ②「七日待ちなさい」は、従順の試験である。
- ③待つことは、神を信頼することである。
- ④この命令は 13 章で破られる。

III. 神は召した者に使命を果たす力を与えてくださる (9～16 節)

1. 9 節

1Sa 10:9 サウルがサムエルから去って行こうと背を向けたとき、神はサウルに新しい心を与えられた。これらすべてのしるしは、その日のうちに起こった。

(1) 神が主語である。

- ①「神はサウルに新しい心を与えられた」
- ②エゼ 36:26 の「新しい心」と同じ意味ではない。
 - *エゼキエルでは、新しい契約における霊的再生。
 - *1 サム 10 章では、王としての使命を果たすための内面的な備え。
- ③神は、王冠を授ける前に、王として歩む心を与えられた。

(3)「これらすべてのしるしは、その日のうちに起こった」

- ①三つのしるしは偶然ではなく、神の御計画であった。

2. 10～12 節

1Sa 10:10 彼らがそこからギブアに行くと、見よ、預言者の一団が彼の方にやって来た。する

と、神の霊が彼の上に激しく下り、彼も彼らの間で預言した。

1Sa 10:11 以前からサウルを知っている人たちはみな、彼が預言者たちと一緒に預言しているのを見た。民は互いに言った。「キシユの息子は、いったいどうしたことか。サウルも預言者の一人なのか。」

1Sa 10:12 そこにいた一人も、これに応じて、「彼らの父はだれだろう」と言った。こういうわけで、「サウルも預言者の一人なのか」ということが、語りぐさになった。

(1) 「神の霊が彼の上に激しく下った」

①王としての務めを果たすための力が与えられた。

(2) 「彼も彼らの間で預言した」

①預言者の一団とともに、神の霊に導かれて神を賛美し、神のことばを語った。

②サウルは、神の霊に支配されている状態になった。

(3) 人々が驚いた理由

①彼らはサウルを農村の青年、ベニヤミン族の一人として知っていた。

②「キシユの子にいったい何が起こったのだろう」

③「まさかサウルが、あの預言者集団の中に加わるとは！」

(4) 「彼らの父はだれだろう」

①預言者になるのは、血筋ではなく、神の召しによる。

②もしそうなら、サウルが預言者集団に加えられたのは不思議ではない。

③予期せぬ出来事の格言として、「サウルも預言者の一人なのか」が生まれた。

3. 13～14 節

1Sa 10:13 サウルは預言を終えて、高き所に帰って来た。

1Sa 10:14 サウルのおじは、彼とそのしもべに言った。「どこに行っていたのか。」サウルは言った。「雌ろばを捜しにです。どこにもいないと分かったので、サムエルのところに行って来ました。」

(1) 預言は一時的なものであった。

①日常生活に戻り、「高き所に帰って来た」。

(2) 叔父の質問

①「どこへ行っていたのか」

②サウルは事実だけを答えた。

③神の特別な働きを経験した後も、静かに次の歩みへ進んだ。

4. 15～16 節

1Sa 10:15 サウルのおじは言った。「サムエルはあなたがたに何と言ったか、私に話してくれ。」

1Sa 10:16 サウルはおじに言った。「雌ろばは見つかっていると、はっきり私たちに知らせてくれました。」しかし、サムエルが語った王位のことについては、おじに話さなかった。

(1) 叔父はサムエルとの会話の内容を知りたがった。

①叔父は、単なるロバ探し以上の出来事があったことを感じていたのだろう。

(2) サウルは必要なことだけを話した。

①神の時が来るまで公表しなかった。

②初期のサウルには慎み深さがあった。

③後年の高慢なサウル (13 章、15 章) と比べると、対照的である。

結論：今日の信者への適用

1. 神は召された者を、そのまま送り出すのではなく、使命に必要な備えを与えてくださる。

(1) サウルは、ロバを捜していた青年であった。

(2) 神は彼を選び、油を注ぎ、しるしを与え、新しい心を授け、御霊の力を注いだ。

(3) 私たち同じである。

(4) 使命を前にして、自分の能力不足を覚えることがある。

(5) 神は、みことばによって導き、聖霊によって力を与え、恵みを備えてくださる。

2. 神の備えを受けた者にも従順が求められる。

(1) 「七日間待ちなさい」という命令は、後に 13 章でサウルが破る命令となる。

(2) 神の力を受けることと、神のことばに従い続けることは切り離せない。

(3) 奉仕の成功は、能力の豊かさではなく、神への従順によって決まる。

3. 召された者は、神の時と機会を待つべきである。

(1) サウルは王に選ばれたことを自ら語り広めなかった。

(2) 神の時を待ち、神が道を開かれるのを待った。

(3) 私たちも、神の時と機会を吟味しながら行動すべきである。

サムエル記第一 (18)

「サウルを王として選ぶイスラエル (2)」

1 サム 10 : 17~27

1. 文脈の確認

I. 王政に向けた準備 (1~9 章)

II. サウルの治世 (10~31 章)

A. サウルの確立 (10~14 章)

1. サウルを王として選ぶイスラエル (10 章)

2. 注目すべき点

- (1) 1~16 節は、私的な任命である。
- (2) 17~27 節は、ミツパでの公的な宣言である。
- (3) くじによる選出は、神の主権を示している。
- (4) サウルは外見において王にふさわしい人物であった。
- (5) 民の反応は一致していなかった。

命題：神は、ご自身の主権によって指導者を立てられる。

この箇所を三つに区分して学ぶと、それがよく分かる。

I. 神は、ご自身の権威によって指導者を選ばれる (17~24 節)

1. 17~18 節

1Sa 10:17 サムエルはミツパで、民を【主】のもとに呼び集め、

1Sa 10:18 イスラエル人に言った。「イスラエルの神、【主】はこう言われる。『イスラエルをエジプトから連れ上り、あなたがたを、エジプトの手と、あなたがたを圧迫していたすべての王国の手から救い出したのは、このわたしだ。』

- (1) サウルの公的即位を前に、神学的な前置きが確認される。

①神こそがイスラエルの真の王であることが再確認される。

(2) ミツパという場所

①7 章では、民が悔い改めた場所

②サムエルがイスラエルを導き、ペリシテ人に勝利した場所

③「エベン・エゼル」の勝利へとつながる場所 (7 章)

④つまり、王政は神との契約とは切り離されていないことを示している。

⑤民は、神の臨在の前で集められた。

(3) なぜ出エジプトを持ち出すのか。

- ①わたしがあなたがたを救った。
- ②わたしがあなたがたを導いた。
- ③わたしがあなたがたを守った。
- ④つまり、イスラエルの真の王は、これまでずっと【主】ご自身であった。

(4) 「すべての王国の手から救い出した」は、士師記の歴史全体を要約している。

- ①モアブ、カナン、ミデヤン、アンモン、アモン、ペリシテ
- ②神ご自身が王として民を救ってこられた。

2. 19 節

1Sa 10:19 しかし、あなたがたは今日、すべてのわざわいと苦しみからあなたがたを救ってくださる、あなたがたの神を退けて、『いや、私たちの上に王を立ててください』と言った。今、部族ごと、分団ごとに、【主】の前に出なさい。」

(1) 王を求めたことは、「神を退ける」行為であった。

- ①民は、サムエルを退けたのではなく、神を退けた。
- ②イスラエルは神への信頼を失い、「人間の王」に安全保障を求めた。

(2) 神は、ご自身の恵みを忘れないように求められた。

- ①イスラエルの問題は、「忘恩の罪」である。
- ②神の恵みを忘れることがしばしば不信仰の始まりになる (申 8 章)。

(3) 神は民の願いを受け入れても、その罪を正当化されたわけではない。

- ①神は時として、人間の間違った願いを許される。
- ②詩 106 : 15

Psa 106:15 そこで 主は彼らにその欲するものを与え 彼らのいのちを衰えさせた。

- ③それでも神の救済計画は前進する。

3. 20～21 節

1Sa 10:20 サムエルは、イスラエルの全部族を近づかせた。すると、ベニヤミンの部族がくじで取り分けられた。

1Sa 10:21 そして、ベニヤミンの部族を、その氏族ごとに近づかせた。すると、マテリの氏族がくじで取り分けられた。そして、キシユの息子サウルがくじで取り分けられた。人々はサウルを捜したが、見つからなかった。

(1) くじは神の御心を示す手段

①旧約時代のくじは、神のご意思を明らかにする方法であった。

②箴 16 : 33

Pro 16:33 くじは膝に投げられるが、そのすべての決定は【主】から来る。

③サムエルは、すでに 1～16 節でサウルに油を注いでいた。

④改めてくじを用いる理由は、民全体が「これは神の選びだ」と認めるため。

(2) ベニヤミン族が選ばれた意味

①最も小さな部族の一つから王が選ばれる。

②神は人間の評価ではなく、ご自身の自由な恵みによって選ばれる。

(3) 段階的な選びの意味

①この進み方には文学的効果がある。

②これは神の選びが徐々に明らかになることを印象づけている。

4. 22～23 節

1Sa 10:22 人々はさらに、【主】に「あの人はもう、ここに来ているのですか」と尋ねた。【主】は「見よ、彼は荷物の間に隠れている」と言われた。

1Sa 10:23 彼らは走って行って、そこから彼を連れて来た。サウルが民の中に立つと、民のそれよりも、肩から上だけ高かった。

(1) 人間は、神の選びを無効にすることができない。

①サウルは選ばれたにもかかわらず姿を現さなかった。

②【主】はサウルの居場所をご存じで、その場所を示された。

(2) 「荷物の間に隠れた」とは何を意味するのか。3つの可能性。

①自分は王にふさわしくないという思いから隠れた（謙遜）。

②王となる責任を恐れた（不安）。

③謙遜と不安の両方のゆえに隠れた。

④後のサウルの性格を暗示しているように見える。

⑤神よりも人を恐れるようになる。

(3) 民は外見に感動した。

①「肩から上だけ高かった」

②8 章 5 節の「諸国のような王」という願いとの対応がある。

③つまり、神は民が望んだような王を与えられたのである。

5. 24 節

1Sa 10:24 サムエルは民全体に言った。「【主】がお選びになったこの人を見なさい。民全体のうちに、彼のような者はいない。」民はみな、大声で叫んで、「王様万歳」と言った。

(1) 「【主】がお選びになったこの人を見なさい」

①サウルの権威の源は神にある。

(2) 「彼のような者はいない」

①第一には、外見的な卓越性を指す。

②サウルは、民の期待にかなう人物であった。

(3) 「王様万歳」(イエヒー・ハメレク)

①「王よ。生きながらえますように」

②これは古代近東で王に対して語られた祝福の言葉である。

③「万歳」は中国に由来する言葉で、「一万年生きよ」「永遠に栄えよ」の意味。

④「長く繁栄してください」「未永く治めてください」という祝福の言葉。

⑤この時点では、民はサウルを歓迎している。

II. 人間の王も神の支配の下にある (25 節)

1. 25 節

1Sa 10:25 サムエルは民に王権の定めについて語り、それを文書に記して【主】の前に納めた。それから、サムエルは民をみな、それぞれ自分の家へ帰した。

(1) 「王権の定め」とは、王政の基本原則である。

①王の権限

②王の責任

③民との関係

④神との関係

(2) 王も神の契約の下に置かれる。

①これがこの節の最も重要な神学的メッセージである。

②古代近東では、王はしばしば絶対的な権力者であった。

③しかしイスラエルでは、王も神の律法に従う者である。

④つまり、神が真の王であり、地上の王は神の代理者である。

(3) 「文書に記して」

①王にも、民にも、守るべき基準が与えられた。

②神の支配は、人間の気分ではなく、啓示されたみことばによって行われる。

(4) 「【主】の前に納めた」

①「【主】の前」とは、神の臨在の前、つまり聖所を指すと考えられる。

②神ご自身が、この契約の証人になられる。

③しかしサウルは、13 章と 15 章で、神の律法に違反する。

III. 神は、王を支える人々を備えられる (26～27 節)

1. 26 節

1Sa 10:26 サウルもギブアの自分の家へ帰って行った。神に心を動かされた勇者たちは、彼について行った。

(1) サウルはすぐに王宮を築いたのではない。

①当時のイスラエルには、まだ王政の制度が整っていなかった。

②サウルはなお故郷ギブアを拠点とし、11 章までは本格的な統治を始めない。

(2) 「神に心を動かされた勇士たち」

①彼らが自発的にサウルを支持しただけではなく、神が彼らの心を動かされた。

②これは旧約でしばしば見られる神の働きである。

* 出 35 : 21 (幕屋建設)

* エズ 1 : 5 (神殿再建)

③勇士たちは神から与えられた支えである。

2. 27 節

1Sa 10:27 しかし、よこしまな者たちは、「こいつがどうしてわれわれを救えるのか」と言って軽蔑し、彼に贈り物を持って来なかった。しかし彼は黙っていた。

(1) 「よこしまな者たち」とは誰か

①特定の集団名ではなく、神を恐れず、共同体の秩序を乱す人々を指す。

* エリの息子たち (1 サム 2 : 12)

* ギブアの暴徒 (士 19 : 22)

(2) 「こいつがどうしてわれわれを救えるのか」

①これは、サウル有能力に対する疑いである。

* ベニヤミン族の出身

* 荷物の間に隠れていた

* 経験も実績もない

②彼らは、サウルだけでなく、神の選びそのものを軽視している。

(3)「贈り物を持って来なかった」

①古代近東では、新しい王に贈り物を献げることは、忠誠の表明である。

②贈り物を持って来なかったのは、新王を認めないという意思表示である。

(4)「しかし彼は黙っていた」

①サウルは、侮辱されても、処罰しなかった。

②これは、王として非常に立派な態度である。

③初期のサウルには謙遜さと自制心があった。

結論：今日の信者への適用

1. 神が立てられた指導者を尊重しよう。

(1) 神が選ばれたサウルに対して、賛成する者も反対する者もいた。

(2) しかし、神はご自身の主権によって王を立てられた。

(3) 今日、教会には牧師、長老、執事など、神が召された指導者がいる。

(4) もちろん指導者は完全な人ではない。

(5) 神の権威に従う限り、指導者を敬い、協力することは、神を敬うことにつながる。

(ヘブル 13 : 17)。

2. 召されたなら、弱さを理由に逃げない。

(1) サウルは荷物の間に隠れていた。

(2) 私たちも、「自分には無理です」「資格がありません」と感じることもある。

(3) 神の召しには、神の助けが伴う。

(4) 自分の能力ではなく、神の恵みに信頼して一歩を踏み出すことが大切である。

3. 神の働きには賛否が伴う。

(1) サウルには、神が心を動かした勇士たちが与えられた。

(2) 一方で、彼を軽蔑する者たちもいた。

(3) 教会の働きでも同じである。すべての人が賛成するとは限らない。

(4) 人の評価や批判に左右されるのではなく、神に忠実であることを第一とすべき。

サムエル記第一 (19)

「サウルの最初の勝利」

1 サム 11 : 1~15

1. 文脈の確認

I. 王政に向けた準備 (1~9 章)

II. サウルの治世 (10~31 章)

A. サウルの確立 (10~14 章)

1. サウルを王として選ぶイスラエル (10 章)

2. サウルの最初の勝利 (11 章)

2. 注目すべき点

- (1) アンモン人ナハシュは、イスラエルに対して屈辱的な要求を突きつけた。
- (2) サウルは、イスラエル十二部族を一つにまとめる王として行動した。
- (3) この勝利によって、サウルの王権が実質的に確立した。

命題：神は、ご自身が選んだ指導者を力づけ、民に救いをもたらされる。

この箇所を三つに区分して学ぶと、それがよく分かる。

I. 救いを必要とする民 (1~5 節)

1. 1 節

1Sa 11:1 さて、アンモン人ナハシュが上って来て、ヤベシュ・ギルアデに対して陣を敷いた。ヤベシュの人々はみな、ナハシュに言った。「私たちと契約を結んでください。そうすれば、あなたに仕えます。」

(1) 「アンモン人ナハシュ」とは誰か。

- ①アンモン人は、ロトとその娘から出た民族である (創 19 : 38)。
- ②その領土はヨルダン川東岸、ギルアデの東側にあった。
- ③士師時代にもイスラエルと戦っている (士 10~11 章)。
- ④「ナハシュ」という名は「蛇」を意味する。

(2) 「上って来て」の意味

- ①必ずしも北上したという意味ではない。
- ②軍隊が攻撃のために進軍して来る場合にも用いられる。

(3) 「私たちと契約を結んでください」の意味

- ①ヤベシュの住民は、「属国となって仕えます」と申し出ているのである。

②戦う前から降伏を申し出るほどに、絶望的な状況にあった。

(4) 士師記 21 章とのつながり

①ヤベシュ・ギルアデは、ベニヤミン族と特別な関係を持っていた。

②部族存続のために、ヤベシュ・ギルアデの娘たちが妻として与えられた。

③サウルにとって、血縁的につながりの深い町であった。

*ペリシテ人はサウルの遺体をベテ・シャンの城壁にさらした。

*ヤベシュの勇士たちは、遺体を取り戻した (1 サム 31 : 11~13)。

2. 2~3 節

1Sa 11:2 アンモン人ナハシュは彼らに言った。「次の条件でおまえたちと契約を結ぼう。おまえたち皆の者の右の目をえぐり取ることだ。それをもってイスラエル全体に恥辱を負わせよう。」

1Sa 11:3 ヤベシュの長老たちは彼に言った。「イスラエルの国中に使者を遣わすため、七日の猶予を与えてください。もし、私たちを救う者がいなければ、あなたのところに出て行きます。」

(1) 右の目をえぐり取る。

①古代の兵士は、左手に盾を持ち、右目で盾の外側を見ながら戦った。

(2) イスラエル全体への屈辱となる。

①「イスラエルには、自分たちの同胞を救う力がない」という事実を公然と示す。

②「こんな者にわれわれを救えるのか」(10 : 27) という問いが試される。

(3) 「七日間の猶予」の意味

①各地に使者を送り、救援軍を募る必要があった。

②もし誰も助けに来なければ、イスラエル全体の無力さが証明されることになる。

③「救う者はいるのか」という問いが、11 章全体を貫いている。

3. 4~5 節

1Sa 11:4 使者たちはサウルのギブアに来て、これらのことばを民の耳に語った。民はみな、声をあげて泣いた。

1Sa 11:5 ちょうどそのとき、サウルが牛を追って畑から帰って来た。サウルは言った。「民が泣いているが、いったい何が起こったのか。」彼らは、ヤベシュの人々のことばを彼に告げた。

(1) 使者たちは、ベニヤミン領のギブアに来た。

①「サウルのギブア」は、サウルの故郷である (10 : 26)。

②使者は、サウル個人にではなく、まず「民」に事情を告げた。

- ③「民はみな、声をあげて泣いた」
- ④王が必要となる最初の危機が訪れたのである。

(3) サウルは畑から帰って来た。

- ①サウルは王に選ばれた後も、これまでの日常生活を続けていたのであろう。
- ②サウルは、「民はどうして泣いているのか」と尋ねる。
- ③そしてナハシュの要求を知った。

(4) 5 節と 6 節の間に「神の霊」が置かれている。

- ①5 節＝人間の無力
- ②6 節＝神の霊による力
- ③7～11 節＝神が与える勝利

II. 救いのために用いられる王 (6～11 節)

1. 6 節

1Sa 11:6 サウルがこれらのことばを聞いたとき、神の霊がサウルの上に激しく下った。彼の怒りは激しく燃え上がった。

(1) 「神の霊がサウルの上に激しく下った」

- ①10：6 では、サムエルが、「【主】の霊があなたの上に激しく下り……あなたは新しい人に変えられます」と預言していた。
- ②旧約時代における聖霊の働きは、新約時代の「内住」とは区別する必要がある。
- ③ここでは、神が特定の使命を遂行させるために、サウルを特別に力づけている。
- ④士師たちの場合とよく似ている (士 3：10、6：34、11：29、14：6)。

(2) 「彼は激しく怒った」

- ①これは自己中心的な怒りではなく、義憤である。
- ②10：27 では、自分が侮辱されたが、サウルは黙っていた。
- ③11：2、6 では、神の民が侮辱されたので、サウルは激しく怒った。

(3) この節は後のサウルとの対比にもなる。

- ①彼は、神の霊によって力づけられ、神の民のために怒り、勇敢に行動する。
- ②サウルの怒りは次第に「自己中心的な怒り」へと変質していく。

2. 7～8 節

1Sa 11:7 彼は一くびきの牛を取り、それを切り分け、使者に託してイスラエルの国中に送り、

「サウルとサムエルに従って出て来ない者の牛は、このようにされる」と言った。【主】の恐れが民に下って、彼らは一斉に出て来た。

1Sa 11:8 サウルはベゼクで彼らを数えた。すると、イスラエルの人々は三十万人、ユダの人々は三万人であった。

(1) 「一くびきの牛を取り、それを切り分けた」

- ①畑で使っていたと思われる牛を切り分け、その肉をイスラエル全土に送った。
- ②「サウルとサムエルに従って出て来ない者の牛は、このようにされる」
- ③これは非常に強烈な召集命令である。初めて王としての権威を公に行使した。

(2) 士師記 19 章との類似

- ①レビ人が、殺されたそばめの遺体を十二に切り分け、イスラエル全土に送った
- ②ただし大きな違いがある。

*士 19 章では、イスラエル内部の罪によって内戦が起こった。

*1 サム 11 章では、外敵からイスラエルを救うために民が一致する。

(3) 「サウルとサムエルに従って」

- ①預言者の霊的権威のもとで、王サウルが政治的・軍事的指導力を発揮している。
- ②13 章で、サムエルの指示を待てずに越権行為をすることとの対比にもなる。

(4) 「【主】の恐れが民に下った」

- ①民が集まった最終的な理由は、「【主】の恐れ」が彼らに下ったからである。
- ②ここにも神の主権的な働きがある。

(5) サウルは、集まった民をベゼクで数える。

- ①ベゼクは、ヨルダン川西側でヤベシュ・ギルアデへ向かうのに適した場所。
- ②イスラエルとユダが区別して数えられている。

*イスラエルの人々——30 万人

*ユダの人々——3 万人

- ③これは、後の南北王国分裂を考えると興味深い表現である。

3. 9～10 節

1Sa 11:9 彼らは、やって来た使者たちに言った。「ヤベシュ・ギルアデの人にこう言いなさい。明日、日が高くなるころ、あなたがたに救いがある。」使者たちは帰って行って、ヤベシュの人々に告げたので、彼らは喜んだ。

1Sa 11:10 ヤベシュの人々は言った。「私たちは、明日、あなたがたのところに出て行きます。」

あなたがたの良いと思うように私たちにしてください。」

(1) 「明日、日が高くなるころ、あなたがたに救いがある」

①サウルたちはヤベシュから来た使者に、「救いがある」と伝える。

*3 節——「救う者がいるだろうか」

*9 節——「あなたがたに救いがある」

*13 節——「【主】がイスラエルに救いを行われた」

②ヤベシュの人々はこの知らせを聞いて喜ぶ。

(2) 翌日、ヤベシュの人々はナハシュに告げる。

①しかし、ことばには意図的な曖昧さがある。

②ナハシュが勝利を確信しているその時、神はすでに救援軍を備えておられた。

4. 11 節

1Sa 11:11 翌日、サウルは兵を三組に分け、夜明けの見張りの時に陣営に突入し、昼までアンモン人を討った。生き残った者は散り散りになり、二人の者がともにいることはなかった。

(1) 翌日は、アンモン人が予想した降伏の日ではなく、神の救いの日となった。

①「明日、日が高くなるころ、あなたがたに救いがある」が、そのまま実現した。

(2) サウルは民を三組に分けた。

①この戦術は士 7：16 のギデオンを思い起こさせる。

②「夜明けの見張りの時」は、午前 2 時から 6 時ごろに当たる。

③アンモン人がまだ十分な戦闘態勢を整えていない時に奇襲攻撃をかけた。

④約束どおり、昼までに救いが実現した。

⑤最初の勝利は、神の力づけ、サウルの従順、民の一致によってもたらされた。

III. 救いを与えた【主】(12～15 節)

1. 12～13 節

1Sa 11:12 民はサムエルに言った。『サウルがわれわれを治めるのか』と言ったのはだれでしたか。その者たちを引き渡してください。彼らを殺します。」

1Sa 11:13 サウルは言った。「今日はだれも殺されてはならない。今日、【主】がイスラエルにおいて勝利をもたらしたださったのだから。」

(1) 民は、「サウルを王として認めなかった者たちを処刑しよう」と言い出す。

①勝利によって民のサウルに対する評価が一変した。

②彼らはサウルではなく、サムエルに処刑を求めた。

(2) サウルは復讐を拒否した。

- ①サウルは、「今日はだれも殺されてはならない」と言う。
- ②「今日は」が二度繰り返されている点に注目すべきである。
- ③この日は、復讐の日ではなく、救いの日なのである。

2. 14～15 節

1Sa 11:14 サムエルは民に言った。「さあ、われわれはギルガルに行って、そこで王政を樹立しよう。」

1Sa 11:15 民はみなギルガルに行き、ギルガルで、【主】の前にサウルを王とした。彼らはそこで、【主】の前に交わりのいけにえを献げた。サウルとイスラエルのすべての者は、そこで大いに喜んだ。

(1) イスラエル全体がサウルを王として受け入れる。

- ①サムエルは、この機会を逃さず王政を確立しようとする。
- ②ギルガルは、イスラエルが【主】との関係を確認した場所（ヨシ 4：19）。
- ③「【主】の前にサウルを王とした」
- ④サウルは、神によって選ばれ、神の権威のもとで民を治める王である。

(2) 「交わりのいけにえを献げた」

- ①この即位式は、単なる政治集会ではなく、礼拝を伴った喜びの祝祭だった。
- ②サウルとイスラエルのすべての者は、大いに喜んだ。

結論：今日の信者への適用

1. 神は、召した者に必要な力を与えてくださる。

- (1) 危機の知らせを聞いたとき、「神の霊が彼の上に激しく下った」（6 節）。
- (2) 今日の信者には聖霊が内住しておられる。
- (3) 「何ができるか」ではなく、「神は私を通して何をなさろうとしているのか」。

2. 自分への侮辱には寛容であり、神のことには熱心である。

- (1) サウルは、自分の名誉には寛容であり、委ねられた使命には熱心だった。
- (2) これは今日の信者、特に指導的立場にある者にとって重要な原則である。

3. 勝利したときこそ、栄光を神に帰す。

- (1) サウルは、「私がイスラエルを救った」とは言わなかった。
- (2) 彼は、自分は神に用いられた器にすぎないことを知っていた。
- (3) 「これは【主】がしてくださったことである」と言えるのは、霊的成熟のしるし。

サムエル記第一 (20)

「サムエルの告別説教」

1 サム 12 : 1～25

1. 文脈の確認

I. 王政に向けた準備 (1～9 章)

II. サウルの治世 (10～31 章)

A. サウルの確立 (10～14 章)

1. サウルを王として選ぶイスラエル (10 章)
2. サウルの最初の勝利 (11 章)
3. サムエルの告別説教 (12 章)

2. 注目すべき点

- (1) サムエルは、公的指導者としての働きを総括した。
- (2) イスラエルの歴史は、神の恵みと民の不信仰の繰り返しであった。
- (3) 王を求めた民の根本的な問題は、神への不信仰にあった。
- (4) 王政が始まって、王と民はともに神のことばに従う必要がある。
- (5) 民が失敗しても、神はご自身の御名のゆえにイスラエルを捨てられない。

命題：神は、失敗した民を見捨てず、ご自身に従う道へと導かれる。

サムエルの説教を 3 つに区分して学ぶと、それが分かる。

I. 忠実な預言者——サムエルの潔白 (1～5 節)

1. 1～2 節

1Sa 12:1 サムエルは全イスラエルに言った。「見よ、あなたがたが私に言ったことを、私はことごとく聞き入れ、あなたがたの上に王を立てた。

1Sa 12:2 今、見なさい。王はあなたがたの先に立って歩んでいる。私は年をとり、髪も白くなった。そして、私の息子たちは、あなたがたとともにいる。私は若いときから今日まで、あなたがたの先に立って歩んできた。

- (1) 民の要求に応じて王が立てられた。

①「私はことごとく聞き入れ」

- (2) サムエルは老齢となり、公的指導者としての働きを終えようとしている。

2. 3 節

1Sa 12:3 さあ今、【主】と主に油注がれた者の前で、私を訴えなさい。私はだれかの牛を取っ

ただろうか。だれかのろばを取っただろうか。だれかを虐げ、だれかを打ちたたいただろうか。だれかの手から賄賂を受け取って自分の目をくらましただろうか。もしそうなら、あなたがたにお返しする。」

(1) サムエルの自己検証

- ①だれかの牛、ろばを取ったか。
- ②だれかを虐げ、だれかを苦しめたか。
- ③だれかから賄賂を受け取ったか。

(2) 王を必要とした理由は、サムエルの不正や失政ではなかった。

- ①民が王を求めた責任がより明確になる。

3. 4～5 節

1Sa 12:4 彼らは言った。「あなたは私たちを虐げたことも、踏みにじったことも、人の手から何かを取ったこともありません。」

1Sa 12:5 サムエルは彼らに言った。「あなたがたが私の手に何も見出さなかったことについては、今日、あなたがたの間で【主】が証人であり、主に油注がれた者が証人である。」そこで、ある人が「証人は」と言うと、

(1) 民による証言

- ①サムエルには不正がなかった。
- ②【主】と油注がれた王がその証人となる。

II. 不信仰な民——イスラエルの罪 (6～18 節)

1. 6～7 節

1Sa 12:6 サムエルは「【主】である。モーセとアロンを立てて、あなたがたの先祖をエジプトの地から上らせた方である」と民に告げた。

1Sa 12:7 「さあ、立ちなさい。私は、【主】があなたがたと、あなたがたの先祖に行われたすべての正義のみわざを、【主】の前であなたがたに説き明かそう。

(1) 過去の歴史から学ぶ。

- ①証人は【主】である。
- ②【主】は、イスラエルをエジプトから救い出された神である。

2. 8～9 節

1Sa 12:8 ヤコブがエジプトに行ったとき、あなたがたの先祖は【主】に叫んだ。【主】はモーセとアロンを遣わし、彼らはあなたがたの先祖をエジプトから導き出し、この場所に住まわせた。

1Sa 12:9 しかし、先祖たちは自分たちの神、【主】を忘れたので、主は彼らをハツォルの軍の長シセラの手、ペリシテ人の手、モアブの王の手に売り渡された。それで先祖たちは彼らと戦うことになったのだ。

(1) 【主】はイスラエルの民の叫びに応答し、モーセとアロンを遣わされた。

① 【主】はイスラエルの民をエジプトから約束の地に導かれた。

(2) しかし民は【主】を忘れ、敵の手に渡された。

①ハツォルの軍の長シセラの手

②ペリシテ人の手

③モアブの王の手

3. 10～11 節

1Sa 12:10 先祖たちは【主】に叫んで、『私たちは【主】を捨て、バアルやアシュタロテの神々に仕えて罪を犯しました。今、私たちがあなたに仕えるため、敵の手から救い出してください』と言った。

1Sa 12:11 すると【主】は、エルバアルとバラクとエフタとサムエルを遣わし、あなたがたを周囲の敵の手から救い出してくださった。それで、あなたがたは安らかに住んだのだ。

(1) 民が悔い改めると、【主】は救助者を送られた。

①エルバアル

②バラク

③エフタ

④サムエル

(2) ここには士師記に見られる循環がある。

①背信 → 裁き → 悔い改め → 救い

4. 12～15 節

1Sa 12:12 しかし、アンモン人の王ナハシュがあなたがたに向かって来るのを見たとき、あなたがたの神、【主】があなたがたの王であるのに、『いや、王が私たちを治めるのだ』と私に言った。

1Sa 12:13 今、見なさい。あなたがたが求め、選んだ王だ。見なさい。【主】はあなたがたの上に王を置かれた。

1Sa 12:14 もし、あなたがたが【主】を恐れ、主に仕え、主の御声に聞き従い、【主】の命令に逆らわず、また、あなたがたも、あなたがたを治める王も、自分たちの神、【主】の後に従うなら、それでよい。

1Sa 12:15 しかし、もし、あなたがたが【主】の御声に聞き従わず、【主】の命令に逆らうなら、【主】の手が、あなたがたとあなたがたの先祖の上に下る。

(1) 王を求めた罪

- ①アンモン人ナハシュの脅威が迫った。
- ②民は【主】にではなく、目に見える王に安全を求めた。
- ③しかし、本来【主】こそイスラエルの王であった。
- ④それでも神は、王政のもとで歩む道を示された。

(2) 王政そのものが罪なのではない。

- ①創 49 : 10, 民 24 : 17 などに王への期待がある。
- ②神に信頼せず王を求めた動機が問題であった。

5. 16～18 節

1Sa 12:16 今、しっかり立って、【主】があなたがたの目の前で行われる、この大きなみわざを見なさい。

1Sa 12:17 今は小麦の刈り入れ時ではないか。【主】が雷と雨を下されるようにと、私は主を呼び求める。あなたがたは王を求めることで、【主】の目の前に犯した悪が大きかったことを認めて、心に留めなさい。」

1Sa 12:18 そしてサムエルは【主】を呼び求めた。すると、【主】はその日、雷と雨を下された。民はみな、【主】とサムエルを非常に恐れた。

(1) 神からのしるし

- ①小麦の刈り入れの時期に雷と雨が与えられた。
- ②これは民の罪を明らかにする超自然的なしるしであった。
- ③民は【主】とサムエルを恐れた。

III. 忠実な神——イスラエルの希望 (19～25 節)

1. 19 節

1Sa 12:19 民はみなサムエルに言った。「私たちが死なないように、しもべどものために、あなたの神、【主】に祈ってください。私たちは、王を求めることによって、私たちのあらゆる罪の上に悪を加えてしまったからです。」

(1) 民の罪の告白

- ①民は王を求めたことが罪であったと認めた。
- ②サムエルにとりなしを求めた。

2. 20～22 節

1Sa 12:20 サムエルは民に言った。「恐れてはならない。あなたがたは、このすべての悪を行った。しかし【主】に従う道から外れず、心を尽くして【主】に仕えなさい。

1Sa 12:21 役にも立たず、救い出すこともできない、空しいものを追う道へ外れてはならない。それらは、空しいものだ。

1Sa 12:22 【主】は、ご自分の大いなる御名のために、ご自分の民を捨て去りはしない。【主】は、あなたがたをご自分の民とすることを良しとされたからだ。

(1) 神の恵み

- ①「恐れてはならない」
- ②過去の罪にとどまらず、これから【主】に従う。
- ③空しいものに向かつてはならない。

(2) 【主】は「ご自分の大いなる御名のために、」民を捨てられない。

- ①ここが 12 章の神学的頂点である。

3. 23 節

1Sa 12:23 私もまた、あなたがたのために祈るのをやめ、【主】の前に罪ある者となることなど、とてもできない。私はあなたがたに、良い正しい道を教えよう。

(1) サムエルのとりなし

- ①民のために祈ることをやめない。
- ②祈らないことを「【主】に罪を犯すこと」と考えている。
- ③「良い正しい道」を教え続ける。

4. 24～25 節

1Sa 12:24 ただ【主】を恐れ、心を尽くして、誠実に主に仕えなさい。主がどれほど大いなることをあなたがたになさったかを、よく見なさい。

1Sa 12:25 あなたがたが悪を重ねるなら、あなたがたも、あなたがたの王も滅ぼし尽くされる。」

(1) 民に残された責任

- ①【主】を恐れる。
- ②心を尽くして【主】に仕える。
- ③神がなされた大いなることを覚える。

(2) 悪を行い続けるなら、王も民も裁きを受ける。

結論：今日の信者への適用

1. 失敗したとき、神から離れるのではなく、神に立ち返る。
 - (1) 民は確かに罪を犯したが、サムエルは、「もう手遅れだ」とは言わなかった。
 - (2) むしろ、「それでも【主】に従いなさい」と勧めた。
 - (3) 失敗したとき最も危険なのは、失敗したために神から遠ざかることである。
 - (4) 過去の失敗は変えられないが、今からどちらを向いて歩むかは選ぶことができる。
2. 自分の忠実さではなく、神の忠実さに信頼する。
 - (1) イスラエルが守られる根拠は、イスラエルが常に忠実だからではない。
 - (2) 神がご自身の契約に忠実だからである。
 - (3) これは今日の信者にとっても大きな励ましになる。
 - (4) 救いの確信の土台は、「私はどれほど神に忠実であるか」ではなく、「神はどれほど私に忠実であるか」ということである。
3. とりなしの祈りを自分の使命と考える。
 - (1) 「私もまた、あなたがたのために祈るのをやめ、【主】の前に罪ある者となることなど、とてもできない」(23 節)
 - (2) サムエルは、祈るべき人のために祈らないことを罪と考えている。
 - (3) 私たちにも、とりなすべき人々がいる。
 - (4) とりなしの祈りという奉仕に引退はない。
4. 神がしてくださったことを思い起こす。
 - (1) 「主がどれほど大いなることをあなたがたになさったかを、よく見なさい」(24 節)
 - (2) イスラエルの問題の一つは、神が過去になされたことを忘れたことであった。
 - (3) 神の恵みを記憶することは、将来に向かって神を信頼する力となる。